帝國實業讀本

改制新版

卷七

教科書文庫
4
810
44-1941
2000302111

42504
教科書文庫
4
810
44-1941
200030
2111

教科書文庫
4
810
44-1941
2000302111

文部省檢定濟
昭和十年六十月三日
實業學校國語科用

帝國實業讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編
文學博士 上田萬年
文學士 長谷川福平 訂補

合資會社 冨山房發兌

広島大学図書
2000302111

資料室
3759
Ha 7

旅人

野田九浦筆

鳴門教育大学
35910

帝國實業讀本 改制新版 卷七

目次

一 日本文學……一
二 をりふしの移り變り……吉田兼好…七
三 家居のさま……吉田兼好…一〇
家居のさま……一〇
栗栖野……一三
おなじ心ならん人と……一三
四 一事を勵むべし……吉田兼好…一四
常ならぬ世……一四
一事を勵むべし……一五

五　櫻あらそひ（狂言）……一八
櫻咲く日本よ（自修文）……吉田紘二郎…三
六　奥の細道その一……松尾芭蕉…二八
七　奥の細道その二……松尾芭蕉…三四
八　「まこと」……相馬御風…三九
九　詩の心……吉田紘二郎…四三
一〇　源三位……（平家物語）…五〇
文學と氣品（自修文）……五七
一一　小松内府……（平家物語）…六三
一二　平家雜感……高山林次郎…七三
一三　みとり日記……小林一茶…七八
一四　ほとゝぎす（俳句）……八四
一五　日本精神の復興……池岡直孝…八六

日本精神と日本武道（自修文）……瓦理章三郎…九五
一六　天地の心（短歌新調）……一〇四
一七　芳流閣上の血戰……瀧澤馬琴…一一〇
一八　流泉啄木……（今昔物語）…一一六
一九　四季小品……一二〇
春雨……中島廣足…一二〇
風鈴……香川景樹…一二一
きぬた……清水濱臣…一二一
秋の山田……藤井高尚…一二二
冬のこゝろ……伴蒿蹊…一二二
二〇　蘭學開眼……一二四

廣島大學圖書之印

帝國實業讀本 改制新版 卷七

一 日本文學

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌もあり、短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎と言つてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌などは卽ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古天皇以來支那の文明が傳はつて、段々と漢文、漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有の歌は、それとは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿(一)、山部

國民歌

(一)歌人。歌聖と稱せられる。第四十一代持統、第四十二代文武、天皇に仕へた。

(二)奈良時代の歌人。人麿と並び稱せられる。

赤人等の先輩歌人で、續いて奈良時代の大伴家持等である。萬葉集には漢文渡來以前の歌も多く載せてあるが、かういふ新進歌人等の歌も多い。優美典雅といふ點に於て、忠君愛國の思想に於て、よく日本國民の上代思想を表したものである。

奈良時代に出來た萬葉集は漢字を以て記された。漢字の音訓を用ひて日本語を記したものである。平安時代になつて百年の後には、假名の發達があつて、平假名で自由自在に國語を記すことになつた。こゝに於て假名文の發達が著しくなつた。萬葉集の後をついで、古今集以下の敕撰和歌集が出來たばかりでなく、竹取物語、伊勢物語を物語の祖として、數多の假名物語、日記、隨筆の類が現れた。就中有名なのは紫式部の源氏物語と、清少納言の枕草紙とで、漢學の素養がその文藻を助けた事は、見逃されぬ事であるが、上古以來行はれた和歌の風流情味が、常にこれ等の文學の背景となり、基礎と

(一)歌人。旅人の子。延暦四年(二四四五年)歿、年五十七。

(二)我が國最古の小說。著者不詳。

(三)平安時代の物語。元慶年中(一一五三—一一五四年)に成立した。著者不詳。二卷。

(四)藤原宣孝の妻。藤原爲時の女。第六十六代一條天皇の頃の人。源氏物語の著者。

(五)清原元輔の女。本名不詳。紫式部と同時代の人。枕草紙の著者。

なつて居るのも、爭はれぬ事實である。大鏡や榮華物語などいふ史實を記した物語も、つまりはその材料を一轉化したものである。奈良時代の和歌卽ち抒情詩が、平安時代には物語卽ち敍事詩に發達したのである。

鎌倉幕府の創立と共に時代は一變した。隨つて文學も一變した。源平二氏の爭が材料に採られた保元物語や、平治物語や、平家物語や、源平盛衰記などといふ軍記物語が、佛家の諸行無常、愛別離苦の思想の下に筆述された。

降つて吉野朝の頃の太平記も、同じく軍記物語である。平安時代の盛時とは、その材料に於てこそそれ〳〵差別はあれ、敍事詩たる點に於ては同樣である。材料の變化と共に言語も變化して、漢語及び漢文脈の加つて來た事は、おのづからその內容と外形との調和を保たしめて居る。徒然草、方丈記なども、佛教の盛なこの時代の著

(一)第五十五代文德天皇から第六十八代後一條天皇までの凡そ七十年間の歷史を記したもの。著者不詳。全八卷。

抒情詩

敍事詩

(二)第五十九代宇多天皇から第七十三代堀河天皇寬治六年(一七五二年)までの宮中に起つた君臣の事を記したもの。著者不詳。全四十卷。

諸行無常

愛別離苦

(三)保元の亂を記したもの。著者不詳。三卷。

(四)平治の亂を記したもの。著者不詳。三卷。

(五)平家の興起から滅亡までの事實を主にしたもの。著者不詳。全二十卷。

名な産物として數へられる。

室町幕府の時代は概して戰亂時代で、無學の世と稱せられて居るが、(一)明朝との交通も繁く、繪畫をはじめ美術工藝の進歩も著しく鎌倉の末からの進歩を承けて、將軍義滿の頃に至つて、能の發達大成を見るに至つたのは、大いに注意すべき事である。平安、鎌倉二時代を通じての敍事詩は、こゝに至つて劇詩の形をなしたのである。能が幕政時代を通じて衰へず、今日にも傳はつて尙盛であるのを見ても、いかにその我が國民の嗜好に投じたものであるかゞわかる。その材料としては、上代の萬葉集から、中古の古今集、伊勢物語、源氏物語等は勿論、平家物語、源平盛衰記、また義經記、曾我物語などの軍記物語に及んで居り、また世話材料も入れてある。歌ふ方から言つても、音樂の方から言つても、舞の方から言つても、出來るだけ當時の粹を拔いたもので、寧ろその精華を集めたものと言つてもよ

(六)第七十八代二條天皇の頃から應保第八天皇の頃まで凡そ二十年の間、源氏の盛衰を記したもの。全四十八卷。著者不詳。

(七)第九十五代花園天皇の文保(一九七年)から第二十代後醍醐天皇の正平(二二〇年)まで、二十年の間の戰亂を記したもの。全四十卷。著者不詳。

(一)支那の國名。足利第一代の將軍。義詮の子。應永十五年(一四〇八年)歿、年五十八。

(七)劇詩

(八)鴨長明の著。建保四年(一二一六年)頃成立。

集大成する

(一)支那の國名。

俗文學

(二)德川五代の將軍。家光の子。寶永六年(一七〇九年)歿、年六十四。

(三)德川十一代の將軍。天保十二年(一八四一年)歿、年五十九。

い。あらゆる藝術の方面を集大成したものとして、當時の武士の修養に資した事は多大であつた。

江戸時代に至つては、學問の復興から、漢學が更に唐宋時代の精華を學んだのは勿論、儒學に於ては、支那に於ても稀な程な大儒が輩出した。また國學の研究も盛になつて、久しく忘れられて居た平安時代以前に遡つて、萬葉集も研究され、源氏物語も研究された。印刷の方法が進んで古書の飜刻が盛になつて、庶民皆太平の世を樂しんで、靜かに文學を翫味する餘裕を得た。漢學、國學の勃興につれて、專ら平民社會に行はれたいはゆる俗文學が發達した。淨瑠璃や、小說や、俳句や、狂歌や、川柳やが、和漢古今の文學に根ざして、新しい國民文學の花を咲かせた。昌平時代の樂天洒落な氣風と、義理人情に勇み立つ犧牲的精神とが、これ等の各種の文學の上に溢れて居る。(一)綱吉將軍の元祿時代と、(二)家齊將軍の文化文政時代とが、その最大

繁盛な時世であつた。淨瑠璃の近松門左衛門、俳句の芭蕉は元祿の世に屬し、小說の曲亭馬琴(一)は文化文政の世に屬する。その他の作家に至つては數限りもない。平民社會の嗜好に投じようとした爲、中には材料、思想に鄙陋なものの少くないのは遺憾である。演劇の發達の著しかつた事も、また注意すべき事柄である。かやうに平民文學の發達したのは、一面に於て平民社會の勃興を意味するので、日本の國民が、東洋の諸國中、明治、大正の御代を待つて大いに世界に活躍するといふ氣運が、既にその上に示されて居るやうに感ぜられる。

維新以後の進歩は、ひたすら西洋文學の新味を加へた事で、東西文明の融和は、我が國文學の上に於ても、いち早く認められるのである。最初は平易な英文の小說、詩歌の飜譯から始つて、次第に佛、獨、露等諸國の文學を咀嚼するやうになり、歐米の新思想は抒情詩、敍

(一)江戸時代の小說の大家。姓は瀧澤、名は解。江戸の人。嘉永元年(一八五〇年)歿、年八十二。

事詩、劇詩の各方面に亙つて、常に新しい傾向、生命を我が文學の上に及しつゝあるのである。上古以來の國文學の研究も益〻盛になつて、一層根柢あり、權威あり、價値ある文學の興るのは、近き將來に期待さるべき事である。但し新奇を競ふの餘り、往々我が國體と相容れず、我が國民性と扞格する思想の輸入される事もあるので、その間の調節は大いに考慮しなければならぬのである。

二　をりふしの移り變り

吉田兼好(一)

をりふしのうつりかはるこそ、もの毎に哀れなれ。(二)ものの哀れは秋こそまされと人毎に言ふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊のほかに春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう〳〵氣色立つ程こそあれ、をりしも雨

(一)吉野朝時代の文學者、歌人。京都の人。正平五年(一三〇一年)歿、年六十八。

(二)「春はたゞ花のひとへに咲くばかりもの哀れは秋ぞまされる」(「拾遺集」、「よみ人知らず」)

氣色立つ

名にこそ負へれ

おぼつかなきさましたる

(一)四月八日。
(二)賀茂祭。もと四月の中の酉の日に行はれた。

(三)六月晦日の大祓。なごしの祓ともいふ。

わさ田

風うちつゞきて、あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古への事もたちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ捨てがたき事おほし。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行く程こそ、世の哀れも人のこひしさもまされと人のおほせられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふく頃、早苗とる頃、くひなのたゝくなど心ぼそからぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀れなり。六月ばらへまたをかし。たなばた祭るこそなまめかしけれ。

やう〳〵夜寒になる程、雁鳴きて來る頃、萩の下葉色づく程、わさ田刈干すなど、取集めたる事は秋のみぞ多かる。また野分のあした

今更に言はじとにもあらず

あぢきなしかいやり捨つべき物

閑かにゝほひ妙なる色にあらはれてみのりの花や春をつくらむ　兼好

遣水すさまじ

(一)十二月十九日から二十一日まで三日間宮中で行はれた御佛事。

(二)朝廷で十陵八墓に幣帛を奉られるその使。

こそをかしけれ。言續くれば皆源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、同じ事また今更に言はじとにもあらず。思しき事言はぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべき物なれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。

吉田兼好筆蹟

年の暮れはてゝ、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなく哀れなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細き物なれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、哀れにやんごと

なき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝ樣ぞいみじきや。

追儺（つるな）より四方拜に續くこそ面白けれ。晦の夜いたう闇きに、松ども點して、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん、ことゞ〳〵しくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方より流石に音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほする事にてありしこそ哀れなりしか。かくて明行く空の氣色、昨日に變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路の樣、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそまた哀れなれ。

（一）十二月晦日に行はれた鬼やらひ。

ことゞ〳〵しくのゝしる

—徒然草—

三　家居のさま

吉田兼好

家居のさま

つきづきし

木立ものふり

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、ひときはしみじみと見ゆるぞかし。

今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心ある樣に、すのこ、すいがいのたよりをかしく、うちある調度もむかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐の、日本の珍しくえならぬ調度ども並べ置き、前栽のくさ木まで心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。

おほかたは、家居にこそ事樣は推しはからるれ。

後德大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりける

(一)龜山天皇の第十一皇子。性惠法親王。

(二)今京都市東山區山科。

心細く住みなしたる庵

かくてもあられけるよ

を西行が見て、「鳶のゐたらん何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞き侍るに、(一)綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、まことや、「烏のむれゐて池のかへるをとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくとこそおぼえしか。後德大寺にもいかなる故か侍りけん。

栗栖野

神無月の頃栗栖野(一)といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細路を蹈分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝかけひのしづくならでは、つゆおとなふ者なし。閼伽棚に菊、紅葉など折散したる、流石に住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと哀れに見る程に、かなたの庭に、大きな

うらなく

る柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少し事さめて、この木なからましかばとおぼえしか。

おなじ心ならん人と

おなじ心ならん人と、しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、うらなくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひゐたらんは、ひとりある心地やせん。

互にいはんほどのことをば「げに」と聞くかひあるものから、いささか違ふところもあらん人こそ、我はさやは思ふなど爭ひにくみ、さるからさぞともうち語らはば、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大かたのよしなしごといはんほどこそあらめ、まめやかの心の友には、遙かにへだたるところのありぬべきぞわびしきや。

四　一事を勵むべし

吉田兼好

常ならぬ世

(一)飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行交ひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。(二)桃李もの言はねば、誰と共にか昔を語らん。まして見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなき。

京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにける樣は哀れなれ。(三)御堂殿の造り磨かせ給ひて、莊園多く、寄せられ、我が御族のみかどの御うしろみ、世のかためにて、行末までと思しおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんと思してんや。大門、金堂など近くまでありしかど、(四)正和の頃南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、とり建つるわざもなし。無量壽院ばかりぞその

(一)「世の中は何か常なる飛鳥川のふの淵ぞけふは瀬になる」(古今集、よみ人知らず)

(二)「桃李言はずかれ春幾たびか暮れぬる。烟霞跡無しし昔誰か栖みし。」(菅原朗詠集、和漢文時)

(三)藤原道長。

(四)第九十五代花園天皇の御代。(一九七二年—一九七六年)

かたとて殘りたる。丈六の佛九體いと尊くてならびおはします。行成大納言の額、兼行が書けるとびら、あざやかに見ゆるぞ哀れなる。法華堂なども未だ侍るめり。これまたいつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬づに見ざらん世まで思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

一事を勵むべし

ある者子を法師になして、「學問して因果の理をも知り、說經などして世渡るたづきともせよ」と言ひければ、教のまゝに說經師にならん爲に、先づ馬に乘習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。

(一)藤原行成。書の名人で、小野道風、藤原佐理と共に三蹟と稱せられた。

(二)藤原兼行。

因果の理

世渡るたづき

桃尻

やう〳〵境に入る

世をのどかに思ふ

二つのわざやう〳〵境に入りければ、愈よくしたく覺えて嗜みける程に、說經習ふべきひまなくて、年よりにけり。

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は諸事につけて、身を立て、大いなる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、先づさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて月日を送ればことごとになす事なくして身は老いぬ。終に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず悔ゆれども取返さるゝ齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れか優るとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨てて一事を勵むべし。一日のうち、一時のうちにも、數多の事の來らん中に、少しも益の優らん事を營みて、その外をばうち捨てゝ、大事を

一時の懈怠即ち一生の懈怠となる

急ぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てゝ十の石につく事は易し。十を捨てゝ十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば惜しく覺えて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行著きたりとも、西山に行きてその益優るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。此所まで來著きぬれば、この事をば先づ言ひてん、日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

一事を必ず成さんと思はゞ、他の事の敗るゝをもいたむべから

ず。人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

——徒然草——

五　櫻あらそひ

アド「これはこのあたりの者で御座る。この頃はいづ方も花の盛ぢやと申す程に、花見に參りたう存ずれども、暇がなさに參る事もえいたさぬ。もはや暇になつて御座る程に、今日は花見に參らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい〳〵、太郎冠者あるか。

シテ「はあ。アド「ゐたか。シテ「お前に居ります。

アド「汝を呼出す事、別の事ではない。この頃は方々の花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行く事もならなんだ。もはや暇になつた程に、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ「これは珍しい事を仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もで御座るが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。アド「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。シテ「これは賴うだ人とも覺えぬ事を仰せらるゝ。さやうに仰せられたらば、人中で恥をかかせられう、身どもは苦しう御座らぬが。アド「して、汝がそのやうに言ふは子細があるか。シテ「なか〳〵、子細こそ御座れ。はなが見させられたくば、私がはなを見させられ。餘所へ御座るまでも御座らぬ。アド「いや、おのれは言語道斷の事を言ひをる。汝が面なは鼻といふ花といふは別ぢや。シテ「さやうでは御座らぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれ

えいたさぬ

賴うだ人

言語道斷

櫻あらそひ（山口蓼洲筆）

ませぬ。アド「なか〳〵でもない事を言ひをる。その歌を詠うで聞かせい。シテ「詠うで聞かせたらば、肝を潰させられう。アド「急いで詠め。

シテ「心得ました。

櫻ちる木の下かぜは寒からで
　そらに知られぬ雪ぞ降りける

これはなんと。アド「こちにも花といふ歌がある。シテ「さらば詠うで聞かせられい。

アド「行きくれて木の下かげを宿とせば
　はなや今宵のあるじならまし

シテ「この方にもまだ御座る。

やま櫻わが見にくれば春がすみ
　峯にも尾にもたちかくしつゝ

アド「それならこちにもある。

(一)紀貫之の作。拾遺集卷一春の部に出てゐる。

(二)平忠度の作。平家物語卷九に出てゐる。

(三)よみ人知らず。古今集卷一春の部に出てゐる。

(一)小野小町の作。古今集卷二春の部に出てゐる。

(二)謠曲「小鹽」の一節。

總別　むさとした事

(三)小說家。名は源次郎。明治十九年(二)四六年佐賀縣に生れた。

(四)西行の歌。首の意は、一つの身では全國に咲く時には花を見る事は出來ないから、身を分けて全國の花の盛をすべて見つくしたいものだ。

自修文

花の色はうつりにけりないたづらに
　わが身世にふるながめせしまに

シテ「それならばこちには謠に御座る。アド「うたへ、聽かう。シテ「櫻(二)かさしの袖ふれて。アド「一段の謠うたふ。いたしやうが御座る。やい、太郎冠者。謠「花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。シテ「はあ、これでつまりました。アド「總別何も知り居らいで、むざとした事を言ひ居つて、某と競合ひをる。あつちへ失せい。シテ「はあ。

アド「えい。シテ「はあ。

——續狂言記——

櫻咲く日本よ

吉田絃二郎(三)

身を分けて見ぬ梢なくつくさばや(四)
　よろづの山のはなのさかりを

これ程に花に對して貪るばかりの愛著を感じた詩人が、世界

祖國　祖先以來住んで來た國。父母の國。自國。

旅枕　たびね。

にあるであらうか。

しかし、この花に對する愛著の念は、日本人にならば西行ばかりでなく、殆どすべての人に見出す事が出來るはずだと思ふ。殆ど私たちすべてが、春になれば、見ぬ梢なく花を見盡さうと思ふ。

日本といふ私たちの祖國が、一番はつきり私たちの心に刻みつけられて來るのは、櫻の花が咲く日である。花が咲いて來れば、日本人全體が、世界のどこの詩人よりも花を愛し、花をたゝへる事を知つてゐる。西行の歌はたま〳〵日本人のすべての櫻の花に對する愛著を代言したものに過ぎない。

私は日本に生れた事を有難いと思ふ。殊に花が咲く日にしみしみそれを感ずる。

山の雪が解け始める。もう南の方からは花の便りが來る。三月も半ば過ぎれば、薩摩、日向あたりの山櫻が咲始める。その頃南方を立つて北の方へと日毎旅枕を重ねる人々は、三月の二十四五

潮曇　海上にたちこめるもや。

聖地　靈場。

(一)イギリスの詩人。（西紀一一三四年―一四〇〇年）

(二)イギリス古文學の傑作で、敍事詩である。カンタベリーからロンドンの聖院に參詣する三十二人の人々が馬上小語つた物語をあつめた體の話を集めたに作られてゐる。

杖所めぐり　禮拜の功德をつむ爲に佛閣を巡ること。

日頃になれば、北九州の山櫻が綻びてゐるのに出會ふ。中國から畿內、東海、東山と、北へ〳〵と旅を續ければ、短い花の命とは言ふものの、勿來關、平泉まで行くうちには、四十日以上の花を見る事が出來る。全く三月から四月と日本國中が花に包まれてしまふ。潮曇に閉されて、あるかなきかに見える小さい隱岐や對馬の島島までもが、日本である限りは、雲のやうな花に包まれてゐる。

西洋では聖地巡禮といふ事が昔からある。(一)チーサーのカンタベリー物語などを讀むと、今の日本の御彼岸の杖所めぐりを思ひ出すが、もうあゝいふのんきな遍路は、かの地では遠い昔になくなつてしまつたであらう。

日本ではまだ四國めぐり、大和めぐり、どこそこの新杖所めぐりといふものが、なか〳〵盛である。そしてそれは花の盛を中心にして行はれてゐる。杖所めぐり、聖地めぐりといふが、實は花をめぐりての旅である。花遍路である。西行にしたところで、實は一

生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聽いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人のやうに思はれる。けれども、彼ぐらゐ日本の春を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

ねがはくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎの望月のころ

彼は春に對しては貪慾であつた。鳴立つ澤の秋を見た頃には、恐らく彼は人生無常の相をそのまゝに受容れて、死も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も三十年もなほ生き續けて行きたいと思つたであらう。湖畔詩人ウォーズウォース(一)であつたかと思ふが、「この附近の風光は實にいゝ。唯一つ惡い事には、餘り景色がいゝ爲に、死ぬ事がいやになる」といふ意味の事を語つた事がある。西行も恐らく同じ事を感じたであらう。伊

世捨人　隱遁した人。

相　すがた。ありさま。

湖畔詩人　十九世紀の初めイギリスの北部の湖水地方に住んだウォーズウォース、サウジイ、コルリッヂなどの詩人の一派を言ふ。

(一)イギリスの詩人。(西紀一七七〇年―一八五〇年)

賀から大和への途すがら、「春なれや名もなき山の朝霞」と歌つた日、芭蕉も恐らく同じ事を感じたであらう。「菜の花や月は東に日は西に」に、蕪村ならずとも、春の日本に生れた幸福を感じないではゐられないであらう。

西行も芭蕉もいはゆる世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨切れぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心ゆくまで自然に浸されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れてゐる。日本國中の人々を一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。

日本人はこせ〳〵してゐるとよく非難される。しかし花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に惠まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化してくれるのか

淨化する　きよくする。

知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣や神詣にかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩く事の出來る子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭蕉といひ、一生のなまけ者であつた。日本の秋を、日本の春を殘る隈なく見盡したいが爲に、家業を捨てゝ歩きまはつた大きな子供である。

日本人程詩を作る國民は他にないであらうと誰でもいふ。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は、花下の行樂を無性に樂しむ事を知つてゐた。日本人は愛すべきなまけ者であつた。その中でも一番大きなまけ者が、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちには、分別くさい人たちが多過ぎてしまつた。其角(一)にしろ、嵐雪(二)にしろ、蕪村にしろ、分別があり過ぎる。この事は、歌人の場合でもやはり同じ事だが。

それはともかくとして、日本人がこれ程多く詩を作るといふ

分別くさい人　わきまへを多。分にもつたらしい顏をする人。

(一)榎本其角。芭蕉の門人中の第一人者。寶永四年(二三年)六十七。四年歿、

(二)服部嵐雪。芭蕉の門人。寶永四年歿、五十四。年

事は、やはり惠まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は惠まれてゐると思ふ。日本人は詩を作る事を忘れてはならない。

譯もなく懷かしい櫻。譯もなく暖かい感じの櫻。譯もなく可憐な櫻。譯もなくあてやかな櫻。譯もなく哀れな櫻。譯もなくさまざまの事思ひ出(一)させる櫻。誰の爲に咲いてくれるのか、誰の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散る事の餘りに早い櫻。

無常の實相を餘りに美しくも、餘りに傷ましくも私たちの心に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、今日は花の霞に包まれてしまつた。私は惠まれた日本を思ふ。

西行も、芭蕉も、「花の咲く今は(二)浮れこそ」したであらう。

今日は日本人に取つて一番明るい幸福の日である。と同時に、一番もの哀れな日である。

あてやか　上品。

(一)「さまざまの事思ひ出す櫻かな」(芭蕉)

(二)西行の「世を捨てゝ身はなきものと思へども雪の降る日は寒くこそあれ」の歌に芭蕉が讃して「花の咲く日は浮れこそすれ」と附けた。

(一)江戸時代の俳人。名は宗房。俳聖と言はれる。伊賀の人。元祿七年(一六九四年)歿、年五十一。

(二)「夫れ天地は萬物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり云々。」李白。春夜宴桃李園序

(三)元祿元年。(一六八八年)

(四)鯉屋杉風。芭蕉の門人。江戸の人。享保十七年(一七三二年)歿、年八十六。別墅は江戸深川六間堀にあつた。

六　奥の細道　その一

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取る物手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に讓り杉風が別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる

(一)今の東京市上野公園から西北に續く地。

(二)東京市足立區。奥州街道最初の宿驛。

ものから、富士の峯かすかに見えて、上野谷中の花の梢、またいつかはと心細し。睦ましき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人人は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚唯かりそめに思ひ立ちて、

矢立の初として

(一)埼玉縣北足立郡。奥州街道の宿驛。

(一)論語にある句。

呉天に白髪の恨を重ぬと雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加(一)といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づ身を苦しむ。唯身すがらにといでたち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさり難き餞などしたるは、流石にうちすて難くて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

三十日、日光山の麓に泊る。あるじの言ひけるやう、我が名を佛五左衛門といふ。萬づ正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜の草の枕も打解けて休み給へといふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮如きの人を助け給ふにやと、あるじのなす事に心を留めて見るに、唯無智無分別にして、正直偏固の者なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、(一)稟の清質尤も尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔この御山を二荒山と書きしを、空海

恩澤八荒に溢る

(一)「たよりあらばいかで都へつげやらんけふ白河の關は越えぬと」(拾遺集、平兼盛)

風騷の人

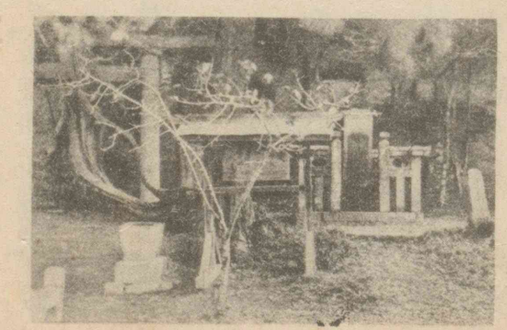
(二)藤原清輔。第七十八代二條天皇の御代の歌人。竹田大夫國行といふ者。この關を過ぐるとて服裝を特に改めた事、清輔の著袋草子に見えてゐる。

上人開基の時、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今この御光一天に輝きて、恩澤八荒に溢れ、四民安堵の栖おだやかなりなほ憚多くて筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。(一)いかで都へと便り求めしも理なり。中にもこの關は風騷の人、心を留む。秋風を耳に殘し、紅葉を面影にして、青葉の梢なほ哀れなり。卯の花の白妙に、茨の花の咲添ひて、雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し、衣裳を改めし事など、清輔(二)の筆にも留め置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴著かな　曾良



白河の關址

(一)磐梯山のこと。
(二)今福島縣(磐城國)の地方で、三田村郡春町が中心になつてゐる。
(三)福島縣(岩代國)岩瀬郡。子石と須賀川との間にある新田。
(四)同郡須賀川町。白河の東北二六キロメートル。
(五)姓は相良、名は伊左衛門。芭蕉の門人。(一二寶永二年三六五年七十八。)歿、
(六)支那湖南省の北部にある大湖。
(七)支那浙江省にある。洞庭湖と共に風光の美を以て稱せられる。
(八)浙江省にある。一名錢塘江。海嘯の奇を以て知られてゐる。

とかくして越えゆくまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津嶺高く、右に磐城、相馬、三春の莊、常陸、下野の地をさかひて、山連なる。影沼といふ所を行くに、今日は空曇りてもの影映らず。須賀川の驛に等躬といふ者を訪ねて、四五日とゞめらる。先づ白河の關いかに越えつるやと問はる。長途の苦しみ、身心疲れ、且は風景に魂奪はれ、懷舊に腸を斷つて、はか〳〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめや奥の田植歌

鹽釜の浦より船をかりて松島に渡る。その間二里餘、雄島の磯に著く。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭、西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。島島の數を盡して、峙つものは天を指し、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重に重なり、三重に疊みて、左に別れ、右に連なる。負へるあり、抱

(一)山を掌る神。
(二)禪僧。土佐の人。萬治二年(一六五九年)寂、年七十八。

けるあり、兒孫を愛するが如し。松の綠濃やかに、枝葉汐風に吹きたわめられて、屈曲おのづから矯めたるが如し。千早振神代の昔、大山祇のなせる業にや、造化の天工、何れの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地續きて、海に出でたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。また松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗、松毬などうち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懷かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島

風雲の中に旅寢す

(一)姓は山口、名は信章。甲斐の人。俳諧、詩に巧みであつた。芭蕉の友。享保元年(一七三六)歿、年七十五。
(二)醫者。芭蕉の友。江戸の人。
(三)姓は中川、美濃の人。芭蕉の門人。
(四)元祿二年(一六八九)三月。
(五)雉兎芻蕘
(六)「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく」(萬葉集、大伴家持)
(七)今宮城縣石卷市。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

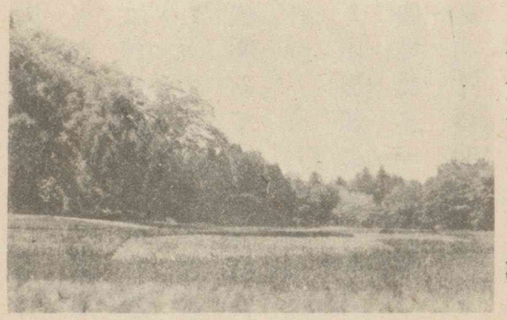
余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂(一)松島の詩あり、原安適(二)、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いて今宵の友とす。且杉風(三)、濁子が發句あり。

七　奥の細道　その二

十一日(四)瑞巖寺に詣づ。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。その後に雲居禪師の德化によりて、七堂甍改りて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。

十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉齒の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎芻蕘の行交ふ路そこともわかず。終に路ふみたがへて、石卷(五)といふ湊に出づ。黄金花咲く(六)と詠みて奉りたる金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を爭ひて、かまどの煙立續き

(一)同縣桃生郡橋浦村。
(二)同縣牡鹿郡稻井村の内。
(三)同縣登米郡新田村新田沼。
(四)同郡登米町。
(五)藤原清衡、基衡、秀衡。
(六)平泉館址。奥の御館。
(七)秀衡が作つた平泉鎭護の山。雌雄の金雞を山上に埋めたといふ。
(八)衣川館。義經の居館。
(九)奥州北部の稱。盛岡市附近から北部へかけて言ふ。南部氏が奥州に封ぜられてから起つた名である。
(一〇)泉三郎忠衡の居館。
功名一時の叢となる



衣川遺址

たり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、あくればまた知らぬ路迷ひ行く。袖の渡(一)、尾駮(二)の牧眞野(三)の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼(四)に沿うて、戸伊摩(五)といふ所に一宿して、平泉に至る。

三代(六)の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡(七)が跡は田野になりて、金雞山(八)のみ形をのこす。先づ高館に上れば、北上川南部(一〇)より流るゝ大河なり。衣川は泉(一一)が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てゝ南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。

(一)柏崖の「春望」の詩句。

(二)今山形縣東村山郡山寺村にある。俗に山寺とも言ふ。天台宗。

(三)同縣北村山郡尾花澤町。

「國破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草やつはものどもが夢の跡

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉、風に破れ、金の柱、霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新たに圍みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歲の記念とはなれり。

五月雨のふりのこしてや光堂

山形領に立石寺(りふしやくじ)といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべき由人々の勸むるによりて、尾花澤(三)よりとつて返す。その間七里許なり。日未だ暮れず。麓の坊に宿借り置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物音聞えず。岸をめぐり岩をはうて佛閣

(一)今の山形市の邊を指したのであらう。

(二)恭點。今北村山郡西郷村の西。

(三)華瀨。同郡大高根村の南。

(四)同縣最上郡と東田川郡との境。高さ六、三〇〇メートル。

(五)今同縣酒田市。

(六)義經の臣常陸坊海存を祀る所と言ふ。

を拜し、佳景寂寞として、心澄行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

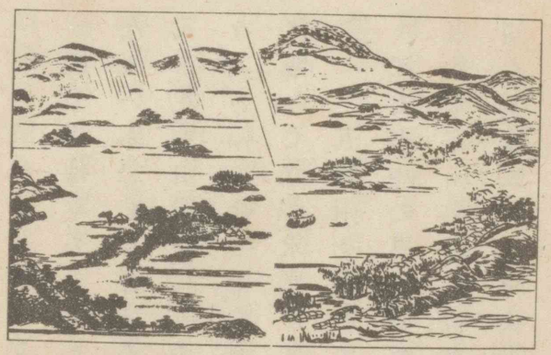
最上川はみちのくより出でて山形(一)を水上とす。ごてん(二)、はやぶさ(三)などいふ恐しき難所あり。板敷山(四)の北を流れて、はては酒田(五)の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船をおろす。これに稻積みたるをやいな船といふならし。白絲の瀧は青葉のひま〳〵に落ちて、仙人堂(六)岸に臨みて立つ。水漲りて船危し。

五月雨を集めて早し最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを蹈みて、その間十里。日影やゝ傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨朦朧として鳥海の山隱る。闇中に摸索して雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色またたのもしと、あまのとま屋に膝を容れて、雨の晴るゝを待つ。

(一)能因法師が閑居の跡と言傳へる。
(二)「きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟」（西行法師）
(三)今宮城縣柴田郡槻谷峠の附近。また由利郡小砂川から飽海郡吹浦へ越える所。此は後者。
(四)今の秋田市。

その朝、天よく晴れて、朝日花やかにさし出づる程に、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸にあがれば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干滿珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうちに盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむや〳〵の關路を限り、東に堤を築いて秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐越といふ。江の縱横一里許、面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象潟は恨むが如し。寂しみに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。



象潟（芭蕉翁繪詞傳所載）

(一)山形縣と新潟縣との境。
(二)市振。越後國に屬し、境川を隔てゝ越中國に對する。
(三)詩人、評論家。名は昌治。明治十六年（二五四三年）新潟縣に生れた。

象潟や雨に西施がねぶの花

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病起りて事を記さず。

荒海や佐渡に横たふ天の川

八　「まこと」

相馬御風

芭蕉や良寛のやうな人たちに取つては、藝術の修行が同時に最も尊い宗教的勤行であつた。それは實に最も嚴肅な修道であり、最も敬虔な勤行であり、最もすなほな恭敬であつた。そして唯「寂」の一字あるのみと芭蕉も言つてゐる如く、この天地の寂味、生の寂味に徹する事が、彼等の修行の根本であつた。芭蕉が、我が詠遺すところ

宗教的勤行

(一)井伊直弼のこと。江戸時代の政治家。彥根の藩主。萬延元年(一八六〇年)刺殺された、年四十六。

の句々皆辭世ならざるはなしと言つた覺悟も、茶湯の交會はすべてこれ「一期一會」と觀念する事を以て茶道の極意とした井伊宗觀の心境も、皆この天地の寂味、生の寂味の味到に外ならなかつた。

しかし、彼等の味到した寂味は、決して謂ふところの空觀でも、虛無見でもなかつた。それは「私」に捉はれた否定ではなかつた。それは實に萬象常住の味はひであつた。隨つて彼等は謂ふところの厭世ではなくして、寧ろほんたうの修行であつた。またそれは徒に自ら獨りを清うせんとするいはゆる獨善の境涯などではなくして、ほんたうに一切を清淨にする念願からであつた。

芭蕉とか良寛とかいふ人々の生活に一貫したところは、實にこの生の寂味、天地の寂味の痛感であつた。永い年月の間の彼等の孤獨な修行は、唯偏にこの味はひに徹せんが爲の修行であつた。そして眞實にこの味はひに徹する事によつて、彼等は始めてほんたう

(二)「とふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からましと」(山家集卷下)

(三)西行法師。

(三)豐臣時代の武將、歌人。名は木下勝俊。(一二三一年)慶安三年(一六五〇年)歿、八十一。

(四)芭蕉の嵯峨落柿舍に於ける俳諧日記。

の「まこと」の心を得、ほんたうの魂の世界を得たのであつた。

「寂しさなくば憂からましと西上人の詠み侍るは、寂しさをあるじなるべし。また詠める

山里にこはまた誰をよぶこ鳥
ひとりすまんと思ひしものを

ひとり棲む程面白きはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば、主は半日の閑を失ふと。素堂常にこの言葉を憐む。余もまた

うき我を寂しがらせよ閑古鳥

とは、或寺に獨居して言ひし句なり」

かう芭蕉自ら「嵯峨日記」の中に書いたのも、さうした自らの心境を告白したものに外ならない。

しかし、前にも述べた如く、芭蕉などいふ人々が、かやうに天地の寂味に徹しようと求めたのは、決して一切を捨去つて空に歸せん

が爲ではなかつた。寧ろその反對に、彼等は、この寂味に徹して始めてたましひの「まこと」を得、それによつてこそ始めて眞實に一切に接し得るのである事を信じたが爲であつた。古池に飛込んだ一匹の小さな蛙の立てた水の音に、天地幽玄のひゞきを聞き得た程の芭蕉の澄切つた心の耳も、(一)垣根に生えた一本の雜草に咲く見るかげもない春の花に、宇宙の生命の輝きを見る事を得た程の彼の澄切つた心の眼も、すべてはこの「まこと」に徹した心の賜でなくて何であらう。

「一期一會」を觀念する事によつて、井伊宗觀は茶湯の交會の眞實の味はひを靜かに徹し味はふ事の出來る「まこと」の心を得た。幽玄な天地の寂味に徹する事によつて、芭蕉は始めて眞實に萬象の生命を慈しみ味はふ事の出來る「まこと」の靜かな心を得た。卽ち彼等の、この天地の寂味、生の寂味に徹せんとした修行は、同時に萬象を

(一)「よく見れば なづな花咲く 垣根かな」芭蕉

攝取し得る心の「まこと」を得んとする欣求だつたのである。去來が芭蕉に正風の大意如何と尋ねた時に、芭蕉が「俳諧はよく萬物に應ずる事を旨とすべし」と答へたと言ふのも、その意に外ならぬ。若しこの場合、去來の問が俳諧道の修行如何と言ふにあつたら、恐らく彼は孤獨の勤行を以て答へたであらう。良寛に取つても芭蕉に取つても、決して孤獨その物が最後の念願ではなくして、眞の孤獨に徹する事によつて得られたたましひのほがらかさ、ひろやかさ、しづけさ、すなほさが尊かつたのである。

——愚庵和尙その他——

九　詩の心

吉田絃二郎

詩をもたぬ人の生活程淺膚なものはない。

詩とは文字の上に表された、或は文學上のいはゆる詩のみを指して言ふのではない。

詩とはすべての生活表現の根柢的要素を意味する。生活に於ける詩とは、生活の背景をなすところの最深所を指すのである。

詩はすべての表現の基調であり、生命であり、光であり、力である。

詩は無限その物の端的な表現である。私たちは悠久その物の相に、就いては知る事が出來ない。しかしながら私たちは、ある機會に、ある機緣によつて、刹那的に悠久その物の相を觀ずる事が出來る。その刹那的な觀照の世界に映つて來る實在の相を實感するものは詩である。

哲學にも散文にも詩がなければならぬ。言換へれば、哲學者も、小說家も、美術家も詩人でなければならぬ。なぜならば、詩はすべての人間の行爲の最深所に生きてゐるものだからである。

眞に生きん事を欲する人間は、すべて詩人でなければならぬ。詩人はいつも最深所を目あてとして生きるものであるから。

詩は神の心である。最も淨化された人間の心である。詩をもたぬ人間は俗人である。

私は詩をもたぬ哲學を憎む。詩をもたぬ文學を憎む。詩をもたぬ詩を憎む。詩をもたぬ俗人の生活を悲しむ。

學問をするといふ事は大切な事である。しかし、學問が唯單に功利的な考にのみ支配されてゐるならば、その學問は尊敬される事はない。それは俗人の學問である。

醫學も、法學も詩をもつてゐなければならぬ。でなければそれは俗人の學問に墮してしまふ。

勤勉な農夫の生活にも詩はある。否、勤勉な農夫こそ最も詩に惠まれた生活をもつてゐるはずである。

彼は誰よりも自由である。彼は誰よりも日の光と、微風と、青空と、小鳥の聲とを惠まれてゐる。彼は誰よりも大地その物を惠まれて

ゐる。

俗人に取つては、日の光や、微風や、青空は何でもないであらう。それ等のものの眞の價値を知る人に取つては、それは高い塔や都會の美よりも、もつと深い本質的な美をもつてゐるはずである。

一莖の草の葉の搖ぎにも詩はある。嬰兒の微笑にも詩はある。

これ等の不可思議な詩を見出す事の出來ないのは、その人の心が曇らされてゐるからである。

詩人は最も澄んだ心の所有者でなければならぬ。詩人は嬰兒の魂をもつた者でなければならぬ。詩人はかしの葉の戰ぎに神の言葉を聽く事の出來る者でなければならぬ。最も澄んだ心をもち、嬰兒の心をもつた人間でさへあるならば、彼は立派な詩人である。

文字で表された詩を書綴るといふ事は、第二義的な仕事である。一番大切な事は、詩人の心をもつといふ事である。たとひ一生唯一

第二義的

行の詩をも綴らぬ農夫の中にも、立派な詩人はあるべきはずだ。

立派な哲學者、立派な學究、立派な工匠、立派な農夫は皆詩人である。

私たちは偶然にも、一つの人生といふものを賦せられた。この無限絶對の人生に就いて、私たちは果してどれだけ思を潛めた事があるか。生活上の諸相に就いて眞劍に、根柢的に考へる事のうちに詩がある。

考へるといふ事は苦痛であるに違ない。しかし、その苦痛の中にこそ、一層彼を深くし、彼の生活を嚴肅化するところの詩がある。

學問をするといふ事の第一の目的は、私たちの生活を深くするといふ事でなければならぬ。私たちの生活を嚴肅化するといふ事でなければならぬ。

俗人と詩人との差は、私たちに賦へられた人生その物の價値を

低く見積るか、或は絶對的のものと見積るかにある。俗人に取つては、人生は唯一つの手段に過ぎない。詩人に取つては、人生は絶對のものである。

詩人に取つてのみこの世界は神の國となつて現れる。俗人は物慾と、虚僞と、排擠との中に生活を苦しみ、詩人は神と偕に呼吸し、神と偕に欣ぶ。

人は神と偕に生きる事を考へなければならぬ。いつも自分等の生存の最深所に就いて考へなければならぬ。

私たちは永劫の時を通じて、この刹那の生存をのみ惠まれてゐる。實際、人間に取つて、この人生は無限な自然の惠である。絶對の機緣である。絶對値の生存である。

この最上絶對の機緣を心ゆくまで感謝もし、實感もするのが詩の心である。全身の血を躍り立たせる程に、生きてゐる事の有難さ

を感じようとするのが詩の心である。これ程の突詰めた心で、白熱的な思念で生活に面する眞劍さが詩の心である。

いつも私たちは心を若々しく持つてゐなければならぬ。嬰兒は木の葉を戰がせる微風にも驚異の眼を見張る。私たちの生活の諸相に對して、自然の一つ〳〵の表れに對して、いつも嬰兒が感ずるやうな驚異を感じなければならぬ。

私たちはいつも人生に對して、燃ゆるやうな熱心さをもつてゐなければならぬ。生悟りであつてはならぬ。死ぬ日まで人生に對する眞劍な努力を失つてはならぬ。人生に面する時、私たちの心はいつも無邪氣な若者でなければならぬ。

若者はよく笑ひ、よく泣き、よく憤り、よく躍る。人生に對して私たちは、いつまでも正直に笑ひ、正直に泣き、正直に憤り、正直に躍らなければならぬ。

詩の心は其所から生れて來る。

人間は年を取るにつれて自然に魂の美しさを曇らされ易い。ある者は社會的空名に、ある者は富といふものに、ある者は權勢に自分の魂の美しさを賣つてしまふ。

青年のみがいつも人間の魂の美しさを保つてゐる。老いてもなほ青年の魂の美しさを保つ事の出來るものは詩人である。

どれ程長く人生を生延びたかといふ事は第二第三の問題である。

どれ程美しく人生を生き得たかといふ事が第一義的な問題である。

第一義的

——わが詩わが旅——

一〇　源三位

抑この源(一)三位入道頼政は、攝津(二)守頼光に五代、(三)三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戰の時も御方にて先を駈けたりしかども、させる賞にもあづからず、また平治の逆亂にも、既に親類を捨てゝ參じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内の守護にて年久しうありしかども、昇殿をばゆるされず。年たけ齡傾いて後、述懷の和歌一首詠みてこそ昇殿をばしたりけれ。

人知れぬおほうち山の山守は
　　木がくれてのみ月を見るかな

これによつて昇殿をゆるされ、正下、四位にて暫くありしが、なほ三位を心にかけつゝ

のぼるべきたよりなき身は木のもとに
　　しひをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道頼政とて、今年七十五にぞなられける。

(一)治承四年(一八四〇年)字治に戰死した、年七十七。
(二)滿仲の長子。
(三)頼國の子。多田頼綱。

一期の高名

(一)第七十六代近衛天皇。

(二)第七十三代堀河天皇。

鳴弦

この人一期の高名と思しき事は多きが中にも、殊には仁平の比ほひ(一)近衛の院御在位の御時、夜な〳〵おびえさせ給ふ事ありけり。有驗の高僧貴僧に仰せて、大法、祕法を修せられけれども、その驗なし。御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黑雲の一叢立來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿僉議ありけり。

去んぬる寛治の比ほひ、(二)堀河の院御在位の御時、主上しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及びて鳴弦する事三たびの後、高聲に「前の陸奥國守源の義家」と名のりたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば則ち先例に任せて、武士に仰せて警固あるべしとて、源平兩家のつはものの中を選ませられけるに、この賴政をぞ選み出されたりける。その時は未だ兵庫頭にて

(一)雅兼の子。正三位中納言。

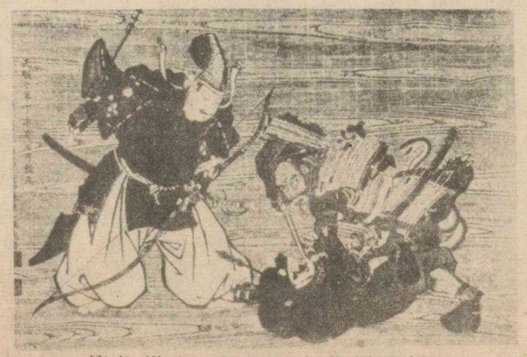
候はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆反のものを退け、違敕の輩を滅さんが爲なり。目にも見えぬ變化のもの仕れと仰せ下さるゝ事、未だ承り及ばず」と申しながら、敕宣なれば、召に應じて參內す。

賴政、賴みきつたる郎等、遠江國の住人猪早太に、母衣の風切はいだりける矢負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣に、山鳥の尾をもてはいだりける鋒矢二筋、滋籐の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。賴政矢二つ手挾みける事は、(一)雅賴の卿その時は未だ左少辨にておはしけるが、「變化の物仕らんずる仁は賴政ぞ候らん」と選み申されたる間、一の矢にて變化のもの射損ずる程ならば、二の矢には雅賴辨のしや頸の骨を射んとなり。

案の如く日比人の申すにたがはず、御惱の刻限に及んで、東三條の森の方より、黑雲一叢立來つて、御殿の上にたなびいたり。賴政き

つと見上げたれば、雲の中に怪しきものの姿あり。射損ずる程ならば、世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つて番ひ、「南無八幡大菩薩」と心のうちに祈念して、よつ引いてひようと放つ。手答してはたと中る。「得たりやおう」と、矢叫をこそしてんげれ。猪、早太つと寄り、落つる所を取つて押へ、柄も拳も透れ〳〵と、續け樣に九刀ぞ刺したりける。その時上下手ん手に火を點して、これを御覽じ見給ふに、頭は猿、軀(むくろ)は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲ぬえにぞ似たりける。怖しなども愚かなり。

主上御感の餘りに、獅子王と申す御劍を下さる。(一)宇治の左大臣殿これを賜はりついで頼政に賜はんとて、



頼政變化をしとむ（高嵩谷筆）

ぬえ（鵺）

(一)藤原頼長。

御前の階を半ばばかりおりさせ給ふをりしも、頃は卯月十日餘りの事なれば、雲居にほとゝぎす二聲三聲音づれて通りければ、左大臣殿

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝を突き、左の袖を廣げて、月を少しそば目にかけつゝ、

弓張月のいるにまかせて

とつかまつり、御劍を賜はりてまかり出づ。この頼政の卿は武藝にもかぎらず、歌道にもまたすぐれたりとぞ、時の人々感じあはれける。さてかの變化のものをば、うつほぶねに入れて流されけるとぞきこえし。

また應保の比ほひ、(一)二條院御在位の御時、ぬえといふ化鳥禁中に鳴いて、屢〻宸襟を惱まし奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政

(一)第七十八代二條天皇。

をぞ召されける。頃は五月二十日餘り、まだ宵の事なるに、ぬえ唯一聲音づれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢つぼをいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鏑取つて番ひ、ぬえの聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。ぬえ、鏑の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鏑取つて番ひ、ひいふつと射切つて、ぬえと並べて前にぞ落したる。禁中さゞめきわたつて、頼政に御衣をかづけさせおはします。今度は大炊御門の右大臣公能公これを賜はりついで頼政にかづけさせ給ふ。とて、「昔の養由は雲の外の雁を射き。今の頼政は雨の中のぬえを射たり」とぞ感ぜられける。

五月闇名をあらはせる今宵かな

と仰せられかけたりければ、頼政

たそがれ時もすぎぬとおもふに

かづく

(一)權大納言藤原實能の子。

(二)支那春秋時代の楚の有名な射術の名人。

と仕り、御衣を肩に掛けて罷り出づ。その後伊豆國賜はり、子息仲綱受領になし、我が身三位して、丹波の五箇(一)の庄、若狭の東宮川(二)を知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛起いて、宮をも失ひ參らせ、我が身も子孫も滅びぬるこそうたてけれ。

——平家物語——

(一)今京都府中郡五箇村。

(二)今福井縣遠敷郡宮川村。

自修文

文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露(りうろ)である。立派な文學のある國は、その國の品格も一段と高く見え、文學の嗜(たしなみ)がある偉人は、一入懷かしい心持がする。魏の曹操(二)はその事功の上から見ては、餘り好(す)かれぬ人物であるが、槊(ほこ)を横たへて、「月明らかに星希に」(四)と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。

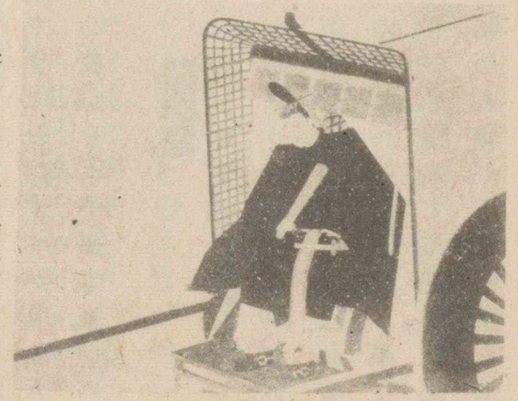
源頼光や頼信(五)よりも八幡太郎義家の方が偉く思はれるのは、

(三)字は孟德、魏の武將。後漢の獻帝の建安二十五年(西紀二二〇年)歿。

(四)曹操「短歌行」の詩句。

(五)頼光の弟。永承三年(一〇四八年)歿、年八十一。

勿來關に馬を停めて「吹く風をなこその關とおもへども、道もせに散る山ざくらかな」と詠んだ風流衣川に矢を番へて「衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひをひろひて世をわたるかな」は餘り感心せぬが「弓張月のいるに任せて」「埋木の花さく事もなかりしに」などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは「かりの契をいかで結ばん」の歌と「梓弓なき數にいる」の辭世とである。平忠盛に「有明の月もあかしの浦風に、波ばかりこそよると見え



右大臣實朝（松岡映丘筆）

(一)岩手縣西磐川郡平泉村か。情致おくゆかしい趣。

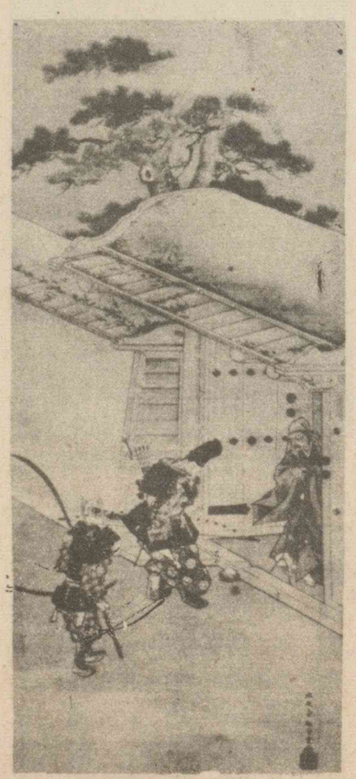
(二)「埋木の花さくこともなかりしにみのなるはてぞ哀れなりける」

(三)「とても世にながらふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばん」

韻事風流な事がら。

(四)清盛の父。鳥羽上皇に寵せられたが、群卿にそねまれ、鹿明の節會に妙を取立てて辱められた。

しか」の風流があつて、眇の俄殿上人も、優に優しい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ、書きつくしてよつぼの石ぶみ」を思へば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。



忠度俊成卿を訪ふ（小堀鞆音筆）

その子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、茲に最大な發達を遂げてゐる。頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽であ

(一)平清盛。

曩祖さきの祖の意。先祖。

霸業諸侯の首領たる事業。

末路　をはり。
公達　親王、攝家、清華などの貴族の子弟。
語草　話のたね。
家訓　家のをしへ。
院宣　院中の有司が院旨を奉じて下知する文書。
(一)文祿三年(二五四年)、二月二十五日、秀次、德川家康、前田利家等と吉野に赴いて花見をした。

る。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾る者は忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乘返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗しい永久な語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事がらである。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人が隨分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康でも、毛利元就でも、乃至は太田道灌でも、皆和歌風流の嗜が深かつた。豐臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違で、かの吉野の花見には、諸大名もまたそれぞ

(一)「九月十三夜」の詩句。
襟度　むねのうち。人を容れる度量。
(二)上杉謙信の臣。後景勝の臣。米澤に封ぜられた。元和五年(二二七九年)、年六十。
風采　人がら。
想望　思ひ慕ふこと。
典型　てほん。

れ詠歌をものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の詩吟は、人をして先づこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳說を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

佐久間象山（池上秀畝筆）

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病床兒叫飢」、

(一)「獄中作」の詩句。
(二)名は醇。山陽の第三子。安政六年(一八五九)斬られた、年三十五。
(三)「辭世」の詩句。
(四)名は啓。信濃松代藩士。元治元年(一八六四)攘夷の爲に京師に斬られた、年十四。
(五)京都清水寺の僧。安政五年薩摩、渥美に斬られた、年四十六。
(六)通稱六郎。攝津の人。元治元年刑死、年五十二。
(七)野村望東尼。慶應三年(一八六七)寂、年七十二。
(八)太政大臣平清盛。

橋本景岳の「誰知松柏後凋心」、頼三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人人が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古、人の情緒を動かすであらう。

一一　小松内府

太政入道はかやうに人々數多縛め置きてもなほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲をどしの腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、

(一)清盛の叔父忠正。
(二)崇德上皇。
(三)崇德天皇の第一皇子重仁親王。
(四)清盛の父忠盛。
(五)鳥羽法皇。
(六)一八一九年。
(七)藤原信頼。
(八)源義朝。

嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀、常の枕を放たず立てられしを脇に挾み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし。「貞能」と召す。

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋をどしの鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、「いかに貞能、この事いかゞ思ふぞ。保元に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に參りにき。一の宮の御事は故刑部卿の殿の養君にてましましゝかば、かたじけなく見放ち參らせ難かりしかども故院の御遺誡に任せて、御方にて先を駈けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月信頼、義朝が謀叛の時、院、内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗

(一)藤原經宗。
(二)藤原惟方。
(三)藤原成親。
(四)藤原師光。入道して西光と言つた。
(五)後白河法皇。
(六)平重盛の邸。

闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てゝ、兇徒を追落し、(一)經宗、(二)惟方を召縛めしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事たびたびに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに(三)成親といふ無用のいたづら者、(四)西光[illegible]申す下賤の不當人が申す事に君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからねこの後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿に遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共がうちより、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍共にふるべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著背長取出せ」とこそ宣ひけれ。主馬判官盛國急ぎ小松殿に馳參つて、「世ははやかう

(一)鳥羽、後白河兩法皇の離宮。今の京都市東山區三十三間堂の東南。
(二)清盛の邸。

候」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿の御著背長を召されて候上は、侍共も皆うち立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせうとは候へども、內々は鎭西の方へ流し參らせんとこそ議せられ候ひつれ」と申しければ、大臣、何によつて只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、(二)西八條殿へぞおはしたる。

門前にて車よりおり、門の內にさし入りて見給ふに、入道腹卷を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひ〳〵の鎧著て、中門の廊に二行に著せられたり。その外、諸國の受領、衞府、諸司などは緣にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引側め〳〵、

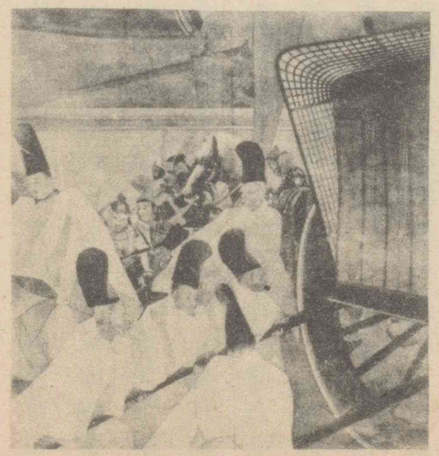
禪門

さやめく

面はゆし

馬の腹帶を固め、冑の緒を締め、只今皆うち立たんずる氣色どもなるに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、流石子ながらも、内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹卷を著て向はん事、流石面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹卷の上に素絹の衣を、あわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけ

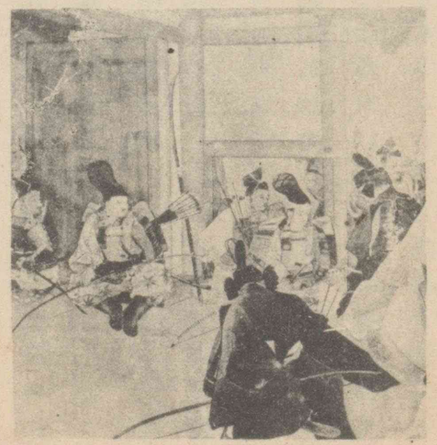


重盛西八條殿へ赴く

一向

るを隱さうと、頻りに衣の胸を引違へ引違へぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

稍あつて入道宣ひけるは、「あの成親卿が謀叛は、事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎭めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし參らせんと思ふはいかに」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はら〳〵とぞ泣かれける。入道「さていかにやいかに」とあきれ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、「この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必



（高橋廣湖筆）

邊地粟散の境

破戒無慚

(一)普天の下、王土に非るなく、率土の濱、王臣に非るなし。(詩經)
(二)支那山西省永濟縣の南にある。
(三)伯夷、叔齊。

ず惡事を思ひ立ち候なり。また御有樣を見參らせ候に、更にうつゝとも覺えず候。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふ事、禮儀を背くにあらずや。就中御出家の御身なるに、法衣を脫捨てゝ忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさん事、內には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんず。かたゞ〳〵恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。先づ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩これなり。その中に最も重きは朝恩なり。(一)普天の下王地にあらずといふ事なし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、(二)首陽山にわらびを折りし賢人も、(三)敕命の背き難き禮儀をば存知すとこそ承れ。いかに況や、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗

蓮府
槐門
一家の進止たり

の身を以て蓮府、槐門の位に至る。しかのみならず國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みたりがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんず。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎭めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は、傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる

平重盛

奉公の忠勤を盡す
撫育の哀憐を致す
佛陀の冥慮

上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の哀憐を致させ給はゞ、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明、佛陀感應あらば、君も思し召し直す事などか候はざるべき。君と臣とをくらぶるに、親疎わく方なし。道理とひがごととを並べんに、いかでか道理につかざるべき。

一入再入

これは尤も君の御ことわりにて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛、初め敍爵より今大臣の大將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずと言ふ事なし。その恩の重き事を思へば、千顆、萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入、再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に參り籠り候べし。その儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これ等を召具して、院の御所法住寺殿を守護し參らせ候はゞ、さすが以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷盧八萬の巔よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。傷ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院參の御供をも仕るべからず。また院中をも守護し參らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、かたゞ〳〵極めさせ給ひぬれば、御運の盡きん事難かるべきにあらず。富貴の家には祿位重疊せり、二たび實なる木は、その根必ずいたむと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に逢ひ候重盛が果報の程こそ拙う候へ。唯今も侍一人に仰せ附けられ、御つぼの中に引出されて、重盛が頭を刎ねられんずる事は、いと易い程の御事

でこそ候はんずらめ。これを各聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめ〳〵と泣き給へば、その座に並みゐ給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。

入道、頼みきつたる内府はかやうに宣へば、世にも力なげにて、いやいや、それまでの事は思ひも寄り候はず。惡黨どもの申す事に君のつかせ給ひて、いかなるひがごとなども出で來んずらんと思ふばかりでこそ候へ」「大臣」たとひいかなるひがごと出で來候べばとて、君をば何とかし參らせ候ふべき」とて、つい立つて中門に出で、侍どもに宣ひけるは、「唯今これにて申しつる事どもをば、汝等はよく承らずや。けさよりこれに候ひて、かやうの事どもを申ししづめんとは存じつれども、餘りにひたさわぎに見えつる間、先づ歸りつるなり。院參の御供に於ては、重盛の頭の刎ねられたらんを見て仕れ。されば人參れ」とて、小松殿へぞ歸られける。

——平家物語——

一二　平家雜感

高山林次郎[1]

一

或は文弱と誹られもせん、或は優惰と笑はれもせん、唯坂東武士のむくつけきに比ぶれば、平家の侍たちこそ心ゆくばかりゆかしけれ。

よしや身は西海の藻屑と果てぬとも、藻鹽草かきのこしたる歌の一つだに殘らざらんには、見果てぬ夢のなんぼう口惜しかるべき。かの沒落の忽劇に際して五條の三位を訪れし薩摩守の上には、情も深く、哀れも殊に勝れて覺えずや。

同じき哀れは經政[2]が上なりき。永代の名器この身と共に亡ぶべからず、この身今都を落ちて、何れの時にか再び歸り來べき。彼が鐵衣の袖に青山の琵琶をかゝへて、泣く〳〵仁和寺の御所に參りぬ

[1] 思想家、評論家、文學博士。樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年（一九〇二年）歿、年三十二。

[2] 平經政。經盛の子。和歌及び琵琶を善くした。壽永三年（一一八四年）谷で戰死した。

はやり男　一二のかけを爭ふ

(一)平敦盛。經政の弟。世に無官の大夫といはれる。一の谷の戰に熊谷直實と戰つて斬られた、年十六。

(二)景時の子景季。

(三)源義經。

ることそ、優に優しき極みならずや。

津の國一の谷の戰に、今日ぞ源平わけ目の軍と、坂東武者のはやり男どもが一二のかけを爭ふ間に、心靜かに一管の樂しみを恣にせし平家の上(一)萬は、心ゆくばかり哀れならずやげに東國の勢何十萬騎かありけめども、鎧の袖に笛插みし人のありつるか。梶(二)原源太が二度のかけにえびらに梅が枝かざしゝは、源氏無二の美譚と聞ゆれど、無官の大夫は薄化粧して討たれしぞかし。

一の谷に敗れてより平家の最後の日は日に近附きぬ。氣にはやる源(三)九郎早くも四國へ渡り來て、平家はまた海に浮びぬ。阿波、讃岐既に背きて、敵の勢は漸う加れり。長汀の煙波もとの如くうるはしけれども、悉く敵地なれば、漕寄すべき渚もなし。あはれ平家、かゝる時にすら風雅の遊は忘れざりき。日暮小舟を渚に漕寄せて、高く紅の扇を艫にさし立てゝ、かの五色に緋の袴著たる女房の、こを射よ

(一)源義仲。
(二)源頼朝。
勝算

とぞ源氏の武者を誘ふめる。那須の與一が譽の弓勢に、兩軍聲を揚げて相和せしが、餘りの面白さに感に堪へずやありけん、平家の侍のかの扇立てたる所にて舞ひすましけるをば、無慚や與一は眞倒樣に射仆しけり。東えびすには人を殺す外に譽といふもののなかりしぞ是非もなき。

二

平家は流石に名門なりければ、沒落の際まで大義名分を執りて動かざりき。

木曾は(一)兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。是に於て、強ひて院宣を請受けければ、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐を討つべき由を言送りぬ。平家の答はかくなりき、「よしや平家一門の世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて、いかでか都へ上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶

頽勢を廻らす

(一)今福岡縣筑紫郡（筑前國）筑紫太宰府町。
(二)緒方維義。
(三)後白河法皇。
(四)平時忠。清盛の妻時子の兄。

してこなたに渡らせ給ふ。須く冑を脱ぎ弦を外し、來りて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか」と。あゝ、何ぞその言辭の堂々として、亡落の輩にふさはざるや。平家人に乏しかりけれども、一時の權勢を弄びて頽勢を廻らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乘ずべき機會なれ。さるを、名分の正しきを執りて、成敗の數を顧ず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は卽ち迂なるべけれども、かくて亡びんは、恥を含みて存へんよりも、いかばかりうるはしかるべき。その太宰府(一)へ落行くや、緒方(二)の三郎使して申しけるは、「誠に重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院(三)の仰默し難ければ、九國に置き奉るべき地も候はず」と。平大納言(四)乃ち衣冠束帶して出向ひて宣ひけるは、「それ我が君は天神四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗、歷代の神靈、我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來、たび〳〵の逆亂を鎭めて、九

(一)平重衡。清盛の子。一の谷の戰に捕へられ、鎌倉に送られ、後木津川で斬られた。年二十九。
(二)平通盛。敦盛の子。一の谷の戰に死んだ。
宥恕
(三)第八十代。
東夷北狄の禍
天に二日なく國に二君なし
妄りに干戈を弄ぶ

州の者どもをば皆內樣へこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をもうち忘れて、東えびすの下知に從ふこそ奇怪至極なれ」と。

本(一)三位の中將一の谷に捕はれけるに、院宣屋島に下りて、三種の神器を都へ上さば、重衡を放ち還さんとぞ傳へける。この時の平家の請文こそ誠に壯大ならびなかりしか。曰く、「院宣謹みて承り畢んぬ。通盛(二)の卿以下、一の谷にて討たれける者その數少からず。何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきにあらず。抑、我が君は故高倉(三)の院の讓を受けさせ給ひてより茲に四年、東夷、北狄の禍にあひて、暫く西國へ行幸あるのみ。天に二日なく、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都へ還るべき。抑、賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められしところなり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて、妄りに干戈を弄ぶ。神罰やがてその身に返るべきか。君にも當家累代

の奉公、亡父數度の忠節を思し召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運茲に盡きなば、鬼界、高麗、天竺、震旦の果までも罷りなん。悲しいかな、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す」と。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲にその名節を枉ぐる事をなさざりき。あはれ、平家の世ざかりは誠に大いなりしが、その沒落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな平家。かくして亡びたりとて、何の恨むるところぞ。

——樗牛全集——

(一)その場所は詳かでない。或は薩南諸島中の硫黄島と言ひ、或は薩南諸島の總名とも言ふ。今奄美大島の東方に喜界ケ島があるが別である。

(二)支那の異稱。

(三)江戸時代の俳人。名は彌太郎。信濃の人。文政十年(一八二七)歿、年六十五。

(四)二四六一年。

一三　みとり日記

小林一茶

享和元年四月二十三日　晴

いかなればかゝるあさましき所にうつぶし給ふらんと抱き起し侍るに、蓬が下の土となり給ふ前表なりと、後に思ひ知りたり。いかなる惡日にかありけん、些か心地惱ましうとなんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるが如くなれば、飯を勸むれども一箸も咽に通らず。こばいかにと、獨り驚き魂を消すと雖もせんすべなく、唯揉みさするより外はなかりけり。

四月二十五日　曇　晴

病日に〳〵重りて、けさは重湯も通らず、たゞ賴みとするは、藥の一しづくづゝ納るのみなり。終日もだえ苦しみ給ふ。傍に附添ふ事の悲しびは、自ら惱むより思ひまさりて苦しかりき。

五月三日　晴

迅(一)磧は己がさじにては藥も得とゞかざる旨告げたりけるに、今まで神佛とも賴みし醫師にかく見はなさるゝ上は、祕法、佛力を借り、諸天應護の憐れみを請はんと思へども、宗法なりとて許さゞれ

(一)一茶の鄉里柏原より程近き野尻の醫。

蓬が下の土となる

諸天應護の憐れみを請はん

(一)長野市大峯山麓にある。天台、淨土兩宗。

玉の緒

たうぶ

ば、唯手を空しうして最期を待つより外はなかりけり。さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招かまほしく、とみに人を走らせけり。今に玉の緒の餘りも、このたびは元の人になり給へと、醫師の來るをのみ待ちゐたりけるに、日入果てゝ門々に灯點す頃、やゝ駕籠の見えければ、とく病人を見せしむるに、迅磧が言へる如く、萬づに一つもこの世の人とは見えずとなん言はるゝ。今は賴むべき綱も切れて、唯湯水の咽に通ふを力に、夜の明くるを待ちたりけり。

四日

昨日にうちかはりて顏色うるはしく、何ぞたうべたきなど言はるゝに、嬉しさ限りなく、よべの藥の驗に親の蘇りたる心地して、かたくりなど練りて參らせけるに、椀に三つ四つすゝりこみ給ふ。道有も、この趣にて變の來らざれば、程なく快氣なるべしとなん言はるゝに、枕に附添ふ己もやゝ安堵の思をなしぬ。道有老歸り給ふに、

(一)今の長野縣上水内郡古間村。一茶の故郷柏原村の南方。

異例

(二)一茶の異母弟。

(三)今の上水内郡柏原村。

古間(一)の里まで見送り侍り。雨雲も西へ東へかたづきて、空の樣こよなう珍しく、時鳥の初音をり得顏に告渡る。この鳥とくも啼きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら、夜は夜すがら心を空にして仕へまつれば、魂狂ふ事のみにして、聞きつるは今日始めての心地なりき。

時鳥われも氣あひのよき日なり

七日　晴

仙六(二)は藥を請ひに善光寺へ行く。

夏の日のつれ〴〵におはしければ、「何ぞたうべたき」と問ひ參らせたれども、穀のたぐひしかく〴〵と好み給はねば、梨一つ參らせたく思へども、みすゞ刈る信濃の不自由なる我(三)が里は、青葉がくれに雪の白々殘るばかり、野もせ、山もせ、夏なほ寒き風の吹くのみなりき。梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたしとむづかり給へ

毒斷

(一)今の上水内郡中郷村の字。柏原の南約八キロメートル。

(二)一茶と繼母との中が惡かつたので、父は家におくよりは一茶を十四歳の時に出江戸へ奉公した。

ど、毒なりと參らせず。あはれ、いつの日か毒斷のなき人にして見ま
ほしく心は騷げども、うつら〳〵と首重たげに見え給ふぞ、あぢき
なき有樣なる。

十日　晴

頻りにありのみたうべたしとむづかり給へば、このあたりのゆ
かりあるもなきも、親しき限り富みたる家、心あたりある門、聞きつ
くし尋ね搜しつくすと雖も、ありのみ一つ貯へたる人とてはなく、
夏さへ寂しき山國なりき。今日は藥の絶間なれば、善光寺へ行かま
ほしく、曉にしたくして門を出でけるに、五月の空もほの〴〵晴れ
て、白雪ははた山にあるからに、青葉がくれの花は春を殘して、種蒔
の山人など懷かしく、時鳥の三聲一聲もこよなく時めく空なるに、
何となく心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻、(一)牟禮てふ驛に至るに、こは
そのかみ(二)一茶江戸へ赴ける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、

(一)二十四孝の一。人晉の故事。孟宗の母が嚴冬中に筍を請うたのに竹林にはいつて孟宗が哀泣したら、雪中に筍が生じたといふ。

(二)二十四孝の人晉の故事。王祥の母が病にのに生魚を請はれ、時冬が河水が凍結したので氷上に坐して衣服をぬいだ。氷が解けたので二四の鯉が躍り出たといふ。

今は二十四年の昔となりき。川の音、坂の形もほのかに心おぼえあ
りて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顏のみとなりけり。辰の刻ば
かりに善光寺に著く

抑、この地は御佛の淨土にしあれば、肆の軒を爭ひ、幌は風にひる
がへり、入る人、出づる人、國々より遙々あゆみを運びて、未來の成佛
をこひねがはぬ人なかりき。己は今日父の命を受けて、御藥使はた
梨を搜しに來つるなれば、天をかけり地をくゞりてなりとも梨一
つ得まほしく、ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして駈
けめぐるに、悲しさはさらに片われ一つありとさへ言ふ人はなか
りき。昔(一)雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、我梨一
つ得る能はざるは、皇天我を捨て給ふかや。佛神我を見限り給ふか
や。一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ちゐ給ふらん。こ
のまゝに歸りて、父を何と慰めんと思へば、胸せき塞がりて、忍び落

つる涙は大道を潤し、往き來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心を靜めけり。この地になき物いづちにかあらん。唯一足も早く戻りて、藥ばし進め奉らんと、手を空しうして吉田(一)てふ里に來れるに、木立の山鴉三、つ四つ我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつぎあへず足をはやめし程に、日影八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつよりも顏色うるはしく、笑を含み給ふに、梨を得ざりし事を語らばまたや氣色を失はん、とやせんかくやせんとためらふに、父の聞き給へばありのまゝを答へ、高田(二)へ參りて尋ね來り參らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根なしごと申して、父をなだめ奉りしは、本意なき夕べなりけらし。

(一)今長野市の内。

(二)今の新潟縣高田市。柏原より北方約五十キロメートル。

根なしごと

一四　ほとゝぎす

(一)内藤林右衛門。もと尾州犬山の藩士、後禪門に入り、俳諧に學びて蕉門に入つた。寶永元年(一七〇四)歿、年六十二。

(二)大島陽喬。俳人。江戸の人。天明七年(一七八七)歿、年七十。

(三)上島治房。俳人。摂津の人。元文三年(一七三八)歿、年七十八。

(四)炭氏。俳人。江戸の人。明和八年(一七七一)歿、年六十三。

(五)俳人。加賀國金澤の人。芭蕉の門人。京都に出て醫を業としてゐた。生歿年不詳。

目には青葉やまほとゝぎす初がつを　素堂
鞘ばしる友切丸やほとゝぎす　蕪村
杜鵑なくや湖水のさゝにごり　丈草
一聲の江に横たふやほとゝぎす　芭蕉
藺田刈つて水雞に遠き寢覺かな　蓼太(一)
行水の捨てどころなし蟲の聲　鬼貫(二)
石工ののみ冷したる清水かな　蕪村
橋おちて人岸にあり夏の月　太祇(三)
夕立や家をめぐりてあひる鳴く　其角
順禮のよる木のもとやところてん　其角
涼しさや朝草門にになひこむ　凡兆(四)

(一)倫理學者。明治大學教授。明治二十年(一五四七年)鳥取縣に生れた。

西洋心を有する變態的日本人

一五　日本精神の復興

池岡直孝(一)

明治維新以來七十年間に於ける日本の急速な興隆は、西洋文化の模倣による事が多大であつた。その結果は、一面に於て利するところがあつたと同時に、他面には失ふところもあつた。その利せる方面とは、主として物質文化の方面である。西洋の自然科學を應用した衣食住、交通、通信、醫術、衛生、農業、工業、軍事等の現在の物質的文化は、これを明治維新前のそれと比較すれば、實に隔世の感がある。この方面に於て、我が國は西洋文化に負ふところが甚大であると謂はなければならぬ。しかしながら、飜つてその失ふところを見るに、西洋精神文化の模倣心醉によつて、我が國在來の精神文化は捨てゝ顧られる事なく、大和心、日本精神は影を潛め、茲に日本人にして西洋心を有する變態的日本人をさへ生ずるやうになつた。かく

思想國難

て危險思想にかぶれる輩が相次いで現れ、いはゆる思想國難に直面するに至つたのである。これ最も憂ふべき現象である。かくて日本精神復興の氣運が起つて來た。加ふるに滿洲國獨立を契機として國際聯盟の脫退となり、愈〻日本精神復興は促進されるやうになつた。今や我が國は內外未曾有の國難に際會し、獨力を以てこれを打開しなければならぬ實狀にある。而してその根本原動力となるものは、大和心、日本精神を措いて他にない。實に現下の非常時日本を救ふものは、大和心、日本精神である。日本精神の復興こそは、急務中の急務と言はなければならぬ。

つら〳〵精神文化に關する學問思想の方面に就いて過去七十年の歷史を通觀するに、傳統的な日本の學問思想は價値なきものとして顧られる事なく、徒に西洋の學問思想を模倣する事に努めた。茲に日本人としての精神文化研究の態度の上に大なる錯誤が

あつたのである。されば吾人は先づ以て、學問思想研究の態度の上に一大反省を加へねばならぬ。

私は遡つて、江戸時代の支那心醉狀態と、現在の西洋心醉狀態とを比較して陳べる事が、甚だ興味ある事と思ふ。

江戸時代の支那心醉に對して、大和心、日本精神の復興を絶叫した者は國學者たちであつた。そこで彼等の主張と態度とを回顧してみたい。本居宣長は漢學を專らとする儒者を非難して、(一)玉勝間の中に次のやうに陳べてをる。

儒者に皇國の事を問ふに、知らずと言ひて恥とせず。から國の事を問ふに、知らずと言ふをばいたく恥と思ひて、知らぬ事をも知顔に言ひまぎらす。こは萬づをからめかさんとする餘りに、その身をもから人めかして、皇國をばよその國の如くもてなさんとするなるべし。されど、なほから人にはあらず、御國人なるに、儒者

(一)十四卷。本居宣長の隨筆。

とあらん者の、おのが國の事知らでであるべきわざかは。たゞし、皇國の人に對ひてはさあらんも、から人めきてよかんめれど、若しから國人の問ひたらんには、「われはそなたの國の事はよく知れども、我が國の事は知らず」とは、流石にえ言ひたらじをや。若しさも言ひたらんには、「おのが國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべき」とて、手をうちていたく笑ひつべし。

今の西洋の學問思想に心醉せる輩は、西洋の事のみ知つて、日本の事は知らないのである。宣長の言は直ちに、これを現代の西洋心醉者に適用する事が出來る。またこれと同樣の趣旨の事を、同書の別の所に次のやうに述べてをる。

すべて何事もおのが國の事にこそ從ふべけれ。そを捨てゝ他の國の事に從ふべきにはあらざるを、かへりて他の國の事に從ふを賢きわざとして、皇國の事に從ふはつたなきわざと心得ため

えいひたらじをや

國境のない學問
國境のある學問
人文
金科玉條

るは、皇國の學者のあしき癖なり云々。

實に現時の學者に取つても、意義の深い教訓でなければならぬ。しかし、宣長の時代の學問に比し、今日の學問は餘程種類が多くなつて來たから、宣長の言は勿論訂正して考へねばならぬ。

今日一口に學問と言つても、種類が甚だ多いが、これを二大別する事が出來る。一つは國境のない學問で、他の一つは國境のある學問である前者は數學や自然科學のやうなもので、何國の人が研究しても、同一の結果に達するものであるから、國によつて相違のあるべきはずはない。しかし、哲學、倫理、政治、法律經濟、軍事、教育といふやうな人文的な學問になると、國によつて異なるべきである。かゝる學問は國境のある性質のものである。然るに、唯西洋人の研究を金科玉條とし、これを鵜呑にし、それによつて日本の哲學、倫理、政治、法律、經濟を解釋しようとする。かくして日本の文化は曲解され、誤

自己沒却
沐猴にして冠す

解される。かやうな事で眞の日本がわかり、その健實な發達を促し得るはずがない。今や行詰つた政治、經濟、それにからまる社會問題、思想問題の解決をなすに當つて、單なる西洋の飜譯的學問思想そのまゝを適用して、それで濟む譯にはゆかない。必ずや我が國の問題は我が國の特有な解釋と解決とによらねばならぬ。

それには、何よりも先づ日本を知る事が肝要である。即ち、日本の國性、傳統、文化、一言にして言へば、日本精神を知る事が根本的に必要である。これが研究は日本の學問或は日本學であり、これを知る事が日本學者の任務である。日本人にしてこの日本の學問をせず、日本を知らずして、どうして外國の文化の眞價がわからう。我を知らずして彼を知る事は不可能である。我を知らずして徒に彼を學ぶのは自己沒却であり、盲拜盲從であり、西洋人から見れば、いはゆる沐猴にして冠するものとの嘲笑に値する外の何物でもないで

これに目を蔽ふ

あらう。

かやうの事を言へば、或人は非難して、それは偏狹固陋の思想であつて、現代の時勢に逆らふものだと言ふかも知れない。勿論余輩とても、徒に西洋の學問思想を排斥し、これに目を蔽ふべしと言ふのではない。先にも述べたやうに、國境のない性質の學問に就いては、進歩した西洋のものを輸入するのは何等差支ない事であるばかりでなく、今後も盛に輸入するを可なりとする。さりながら、國境のある學問思想に就いては、これと大いに異なるものがある。凡そ西洋の學問思想は、西洋の特殊な事情に條件づけられて生れたものであるから、直ちにこれを我が國のものとするのは誤つてゐる。我が國には當然我が國獨自の學問思想があるのである。然らば一體何の爲に西洋の學問思想を研究するかと言ふに、善きを取り惡しきを捨てゝ、これを皇國に用ひんが爲に外ならぬ。國境のない學問の場合でも、この主意を忘れてはならぬが、殊に國境のある學問思想の研究に就いては然りである。されば、西洋の學問思想を研究するのは、今後も大いに努めなければならぬが、皇國の事を忘れて、動もすればひたすらに西洋に心醉する結果は、彼我の相違を忘れ、彼を以て我を律せんとするに至る。茲に主客顚倒の結果を生じ、不測の禍をおのづからに釀し來るのである。されば、外國の學問思想の研究には、先づ皇國本位の立場からこれを批判し、同化し、善用すべきであつて、徒な心醉模倣は絶對に止めねばならぬ。日本の學者は飽くまでも皇國第一を心掛けねばならぬ。私は此所で國學者平田篤胤の言を借用したい。彼の伊吹於呂志といふ書の中に「儒生」の事を論じた冒頭に次のやうな一節がある。

彼を以て我を律す

今の世の儒生輩の學風も、大方は孔子の意に反く事で、實に歎息の至りで御座る。それは、本として學ぶべき皇國の學びをせず、漢

(一)江戸時代の國學者。秋田の人。天保十四年(一八四三)歿、年六十八。

(二)二卷。神道に關する講話を筆錄したもの。

籍のみを學んでをるが、學問は何の爲にする事と心得たるか。すべて學問の道は、たとひ外國の事を學ぶに致せ、その學ぶ主意は、その善事を取つてこの御國の御用にせんとて學ぶことぢやによつて、先づ御國の事を本とし學んで、さて外國の學びに及ぶが順道で御座る。かの卑しき口ずさびにも、「虎の鳴く聲を聞かれて儒者困り」。また(一)「魯の國のせんぎする間に腰かゞみ」と申したは、儒者のこの癖を詰つたもので御座る云々。

(一)周の武王の弟周公旦の封ぜられた國。今の山東省滋陽縣地方。

有意義な教訓

右の一節は、現代の西洋心醉に陷つた學者に取つて、有意義な教訓であると思ふ。私は「魯の國のせんぎする間に腰かゞみ」を、現代的に「西洋の研究する間に腰かゞみ」と作りかへてみたい。皇國に生れながら皇國の事は研究せず、西洋の事ばかり詮索して、御國の用にもたゝず老いてしまふ。これでは、皇國の學者としての眞の使命は、果されたものではない。勿論、西洋の學問思想を研究するのを非難するのではない。その研究を皇國第一、皇國本位の立場から爲し、これを善用して、皇國の學、日本學に資せしめる事を忘れるのを非難せざるを得ないのである。

國境ある學問思想の研究を爲すに當つては、我が皇國日本を根基として研究すべきである。この心構を以てするならば、萬卷の洋書を讀んでも決して迷ふ事はない。否その反對に、善きにつけ惡しきにつけ、皆他山の石として、皇國の學問思想の發展に資せしめ得るのである。

他山の石

—日本精神の闡明—

自修文

日本精神と日本武道

(一)倫理學者。東京高等師範學校教授。明治三年(一八七〇年)兵庫縣に生れた。

(一)わたり　瓦理章三郎

賀茂眞淵は日本魂を解釋して、「高く直き大和魂」と言ひ、「その高き中にみやびあり、直き中に雄々しき心はあるなり」と述べてゐる。平田篤胤は武勇である事を我が日本魂の一特性とし、「御國人

(一)みやび　風雅。

とぎて佩く　磨いで心に保ち持つ。

はおのづからに武く正しく直に生れつく。これを大和心とも御國魂ともいふで御座る。と言つてゐる。「武士のやまと心は折れじ曲らじ」「武士のやまと心をとぎて佩く」などと言つて、武士といふ語が大和心の枕詞として用ひられるやうになつてゐる。この日本魂が卽ち日本精神であつて、武といふ事が日本精神の一特質を成して居り、その武なる日本精神の道として發現したものが、卽ち日本武道である。故に日本精神と日本武道とは、根本的に一體の關係を固有してゐるものであつて、日本精神を離れて日本武道を理解する事も出來なければ、日本武道を外にして日本精神を體得する事も出來難いものとなつてゐる。私は此所に聊か兩者の關係を述べてみたいと思ふ。

日本精神は全體としていかなるものであるかと言ふと、我が國を皇國としてこれを永遠に興隆せしめて行くところの精神である。本來、國家的な事が我が日本精神の特質であつて、これを

氣習　氣風習慣。
肇造　はじめつくること。創造。
障碍　さまたげ。
要約すれば　つゞめれば。

西洋の個人本位の氣習や、漢土の家族本位の思想に比べると、著しい差違がある。蓋しこの特質を有する精神は、我が國が悠久の昔から皇國として肇造された事に由來し、また曾て革命の行はれた事もなければ、他の征服を受けた事もなく、儼として自主獨立の歷史を作り來つた爲に益、深厚に涵養され、この精神とこの歷史とが相俟つて、我が國運を將來に無窮ならしめつゝあるものと思はれる。故に我が日本精神は、皇國を無窮に隆昌ならしめる事を以て根本の要義とし、他のいかなるものにも、この國體の尊嚴、國運の發展に障碍を及さしめる事を許さない。一朝この國家國體に危險を感ずるやうな事があれば、日本精神は全力を揮つてその障碍に抵抗し、その危險を排除しなければ已まない。それが卽ち我が日本精神の具へてゐる武德である。更にこれを要約すれば、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの精神力が、卽ち我が日本の武德であつて、この武德を實地に施し行ふところの道が、

殺を好む　殺伐な事を好む。

中外　國内と國外。

無疆　限りがない。

平和を目的とし云々　平和を最後の目的としこれを第一の價値とし、あるものとし、武勇は平和に到達する爲の第二義的な價値をもつてゐるものであるとするのではない。

即ち我が日本の武德なのである。

それで我が日本の武德武道は、決して個人としてその猛威を振はうとするものでもなければ、民族としてその征服慾を逞しくしようとするものでもない。血に飢ゑ肉に饑ゑ、殘忍强暴で殺を好むが如きは、我が日本精神の最も嫌ふところである。我が日本の武德武道を他の一面から見れば、中外の平和を致し、我が皇國の隆運を無疆に開かうとする精神その物である。我が國では平和を愛する精神も、尙武の精神も、その實一つのものである。平和の爲の武勇として、平和を目的とし第一次的の價値あるものとし、武勇を手段とし第二次的の價値あるものとするのではない。尙武の精神その物が直ちに平和を愛する精神なのである。尙武の精神の强さは、あらゆる障碍を排し、健全な平和を實現しようとする精神の强さを示すものであつて、尙武の精神が强ければ强い程、益〻平和が高度に創造されるのである。故に我が國では、

象徵する　說明を用ひず唯形にあらはして、その意義を感知させる。

ちはやぶる　神の枕詞。

歲德　歲德神のある方向。歲德神は陰陽家で祭る神で、この神のある方があき即ち明の方である。

沐浴齋戒　ゆあみして身をきよめ心を淸らかにして、つゝしみを守つてゐること。

武德武道は神聖なものであるとされてゐて、この武德武道を象徵するものとして、武器もまた神聖視されてゐる。畏くも三種の神器の中には草薙の靈劍がある。また神社に神劍があり、家々には傳來の寶刀がある。古への武士は、每年正月に太刀の拔初といふ事を行つたが、先づ敵のある方か、または門外へ向つて、

ちはやぶる神の教を學びつゝ
惡魔をはらふものゝふの太刀

といふ歌を三たび唱へて、その太刀を拔放ち、それを鞘に收める時、歲德の方へ向つて武運長久、國土安穩と唱へて、祈念をこめたものである。これは決して新年早々に殺伐な行を演ずるのではない。其所には武士の護國の精神と、颯爽たる意氣とが見られるばかりで、少しも血腥い、いやな感じを存しない。すべて刀劍は邪氣を鎭壓し、太平を致す爲の物とされてゐる。刀を鍛へるにも、切味のよい物をと殺氣を含んですると必ず疵物が出來、沐浴齋戒

活人劍　人道の爲に害惡を去る劍。

荒ぶる神等　此所では熊野にあつて威力を振ふ神たち。

ことむけやはし　歸順させ。

(一)奈良縣高市郡畝傍町。

(二)支那の周代に出來た易の道で、今日世に傳はる易道。

して天下太平、國土安穩の祈念をこめてこそ、始めて圓滿な名刀が出來ると言傳へられてゐる程である。「兵は凶器なり」などいふ事は漢思想である。元來物としての武器には吉も凶もないが、これを使用する者の精神を象徴する物として、吉とも凶とも見られる。劍を殺人劍とせずして活人劍とする我が國に於ては、「兵は靈器なり」である。

我が國第一代の天皇を神武天皇と申し上げるが、古事記に天皇の御創業を贊し奉つて、

荒ぶる神等をことむけやはし、伏はぬ人等をはらひ平げて、(一)畝火の白檮原宮にましまして天下知ろしめしき。

と言つてある。これ實に我が國の皇道であり、武德であり、武道であつて、周易(二)の「神武にして殺さず」の語の如きも、まだ我が國の神武の意義を盡すに足らない。

この皇道を仰ぎ、國民のそれ〴〵の立場に於て義勇公に奉ず

各自の領主を云々　めい〳〵の領主に對して仕へたのであつて、國家に對して奉公するといふやうな關係にあつたのではない。

末造　末期。

西力の東漸　西洋の勢力が次第に東洋諸國に及んで來ること。

るのが、我等の武道である。故に我が國の武道は、奉公の精神を以て第一義とする。後世武士を奉公人と言ひ、その稱が更に下級にまで及んだのも、やはりこの精神を傳へてゐるのである。かの群雄割據となり、次いで封建の制度を成すに至つた時代には、武士の奉公といふのも、各自の領主を對象としたもので、國家的の意義はなかつたやうであるけれども、その究極するところは、やはり皇國の公に奉ずる事であつた。されば、こそ織田、豐臣の二雄の勤王によつて、天下は漸く統一の緒に就いたのである。江戸時代の末造、西力の東漸により、我が國家の獨立が憂慮されるやうになると、

しきしまのやまと心を人問はゞ
蒙古のつかひ斬りし時宗

と慷慨して、日本精神が大いに作興され、やがて幕府は政權を返上して明治維新となり、諸藩は版籍を奉還して國家の統一と獨

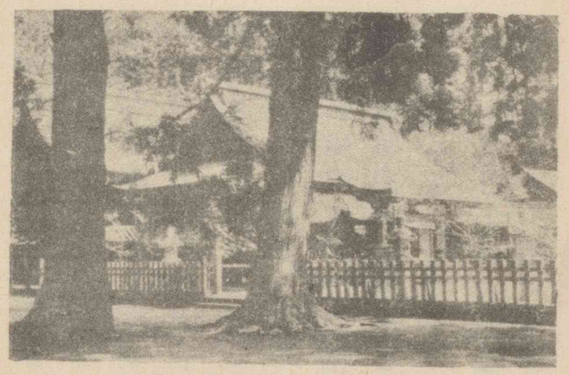
本具　根本に具つてゐること。

國難に殉ずる　國難の前に命を投出す。

英靈雄魂　七生滅賊、七生報國などの精神をいふ。

贊翼　そばから力をそへて輔けること。翼贊。

立とが完全になり、國運の大發展を致すやうになつたのは、奉公を第一義と心掛けた諸藩の武士に、皇國の公に奉ずるといふ日本精神が遍く本具してゐて、それが國難に激發して大活躍をしたからである。かうなると、奉公は忠君であり報國であつて、しかもその忠君報國は、單に一死國難に殉ずるといふ事を以て足れりとせず、それを以て永遠の事として、その精神を「七生滅賊」「七生報國」などいふ語で表現し、英靈雄魂は相次いで後進の士氣を鼓舞作興し、維新回天の偉業を贊翼して、明治時代の隆運を開いたのである。この義勇奉公の日本精神は、我が建國と同時に國民に本具せるもので、もとより或時代、



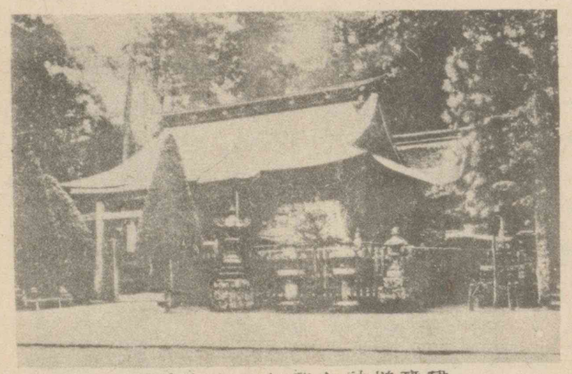
經津主神を祀れる香取神宮

源頭　そも〳〵の始め。もと。

(一)日本書紀神代卷。

或階級の人々に限つたものでなく、いつの代にも全國民に遍在してゐる。要は、これを自覺しこれを發揮する事に存する。そしてその淵源は夙に我が國史の源頭に仰ぎ見られるのである。我が國の武神であらせられる建甕槌神のタケもミカもツチも、皆威靈勇武を意味する語であるが、天祖天照大神が葦原中國を征討し給ふ時に、經津主神のみがその任に推薦されて、建甕槌神はこれに與らなかつた。そこで、(一)

この神進みて曰く、豈唯經津主神のみ丈夫にして、吾は丈夫にあらざらんやと。その辭氣慷慨、故以て經津主神に配へて葦原中國を平げしむ。



建甕槌神を祀れる鹿島神宮

凜冽　はげしいこと。

儀範　てほん。

と言傳へられてゐる。その自發的な義勇奉公の精神には、眞に凜冽たるものがある。この後もこの神は靈劍を下して神武天皇の創業を輔け奉つたといふ言傳もあり、またその昔我が日本民族と蝦夷と對抗して多難を極めたと思はれる東國に鎭坐して、その威靈は長へに邊境を護つてゐる。實にこの武神を永遠の儀範と仰いで、我が日本武道はその歷史を進展すべきものたるのである。そして今日は既に武士の時代ではなく、全國民の時代であるから、我等は我が國の武道の淵源するところに就いて深く體得するところがなければならぬ。また我が日本武道の特色とするところは、すべてこの義勇奉公の日本精神に根柢を有しないものはないのであるから、この根本精神を離れて日本武道が何たるかを理解する事も出來ない。

——日本武德論——

一六　天地の心

(一)歌人。本姓名は久保田俊彥。長野縣の人。大正十五年歿、年五十。

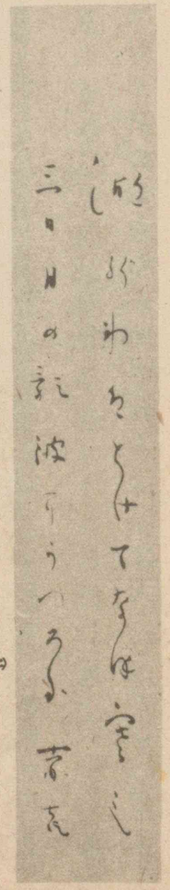
湖の氷はとけてなほ寒し三日月の影波にうつろふ　赤彥

(二)歌人。名は繁。宮崎縣の人。昭和三年歿、年四十四。

わが渡る五月の海に魚くらげくらくらげさびしく群れてさゞ波もなし　牧水

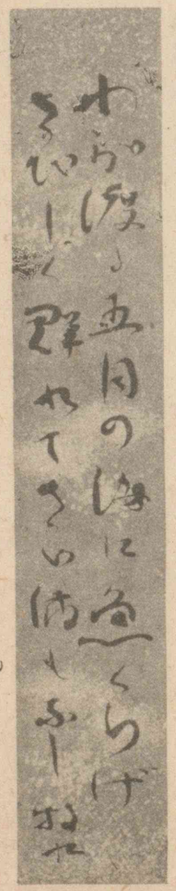
(三)歌人。名は雄太郎。明治十七年(一八八四)東京市に生れた。

高槻の梢にありて頬白のさへづる春となりにけるかも　島木赤彥



島木赤彥筆蹟

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすなり山ざくら花　若山牧水



若山牧水筆蹟

牛のゆく白河路の水車かたりことりといとまあるかな　金子薫園

(一)歌人、書家。名は三郎。明治十年(二五三七年)東京市に生れた。

(二)歌人。京都市の人。鐵幹と號した。昭和十年十三。歿、年六十六

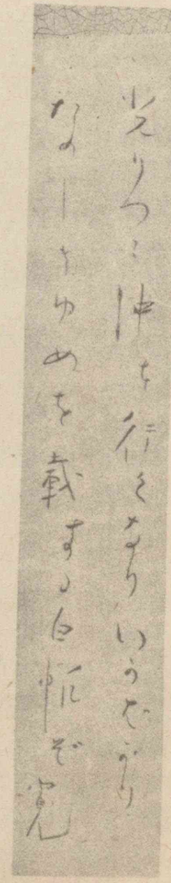
(三)歌人。名は洋三。明治十六年(二五四三年)神奈川縣に生れた。

(四)歌人、小說家。茨城縣の人。大正四年十三。歿、年七十七。

光りつゝ沖を行くなりいかばかりたのしきゆめを載する白帆ぞ　寛

葉ざくらの葉だりの露のあさじめり山吹草のはな咲きにけり　(一)岡麓

鳴きに鳴くあさまし長しかしがましみじかき歌をしらぬ蟬かな　(二)與謝野寛



與謝野寛筆蹟

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花さかりなり　(三)前田夕暮

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども　(四)長塚節

(一)歌人。廣島縣の人。昭和九年六。歿、年四十

(二)歌人。明治二年(二五二九年)愛媛縣に生れた。

(三)歌人、國文學者、文學博士。本名は折口信夫。明治二十二年(二五四九年)大阪市に生れた。

(四)歌人。明治二十二年金澤市に生れた。

夏山をめぐり疲れて日暮方となりの國の出雲へくだる　(一)中村憲吉

磯の香のたゞよふ町をはなれたり蘆のうれ吹く風のすがしも　(二)石榑千亦

夕かげのあかりに浮ぶ土の色ほのかに靄ははひにけるかも　(三)釋迢空

この秋をふたゝびたくや蚊いぶしのしみ〴〵と眼にしみにけるかな　(四)尾山篤二郎

(一)歌人。醫學博士。明治十五年(一八八二)山形縣に生れた。

(二)歌人、畫家、國文學者。文學博士。東京女子高等師範學校教授。柴舟と號する。明治九年(一八七六)岡山縣に生れた。

(三)歌人、國文學者。文學博士。明治五年(一八七二)三重縣に生れた。

(四)歌人。名は幾多郎。千葉縣の人。昭和十三年歿、年四十三。

しづかなるたうげを登りこし時に月のひかりは八谷をてらす　齋藤茂吉(一)

しづやかに月は照りたりあめつちの心とこしへ動かぬがごと　尾上八郎(二)

ゆく秋の大和の國の藥師寺の塔のうへなるひとひらの雲　佐佐木信綱(三)

おりたちてこのたいぜいのよろしもよ原は大田をけふうるかも　千樫

古泉千樫筆蹟

(四)

(一)歌人、詩人。名は隆吉。明治十八年(一八八五)福岡縣に生れた。

(二)歌人。千葉縣の人。大正二年歿、年五十。

(三)歌人、國文學者。宮城縣の人。明治三十六年(一八九三)歿、年四十二。

天地のよもの寄合を垣にせる九十九里のはまに玉拾ひ居り　左千夫

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひとつかける　北原白秋(一)

松原のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮のかげ　伊藤左千夫(二)

みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝の家に　落合直文(三)

一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二もとある松

伊藤左千夫筆蹟

(一)「禍の福における、何ぞ糾纆に異ならんや。」(史記、賈誼傳)

(二)「禍は福の倚る所、福は禍の伏す所、たれか其の極を知らん。」(老子)

(三)下總國(茨城縣)古河。

一七　芳流閣上の血戰

瀧澤馬琴

古への人言はずや、(一)「禍福はあざなへる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし」。そは(二)福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうちに年を經て、得難き時を得てしかば、遙々(三)滸我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の、刃はもとの物ならで、我が身を劈く雷とぞなりし。憾を茲に釋く由もなく、事急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばやと思ふばかりに、あまたの圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき途のなければ、其所に必死をきはめたる、心のうちはいかなりけん、思ひ遣るだにいと傷ましし。

からめる(搦)
なまじひ(慾)

身を霞ませて登る

(一)利根川の異稱。

むさゝび(鷸鳥)

されば、また犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫がれし、禍は今恩赦の福。我が縛の索解けて、人にぞかゝる捕手の役儀「犬塚信乃をからめよ」とて、なまじひに擇み出されつ、他の憂を身の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く、彌高き、かの樓閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸のほてりを渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には大河滔々たる、此所生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷りし、敵にしあればいかで我、繫ぎ留めんとむさゝびの、樹傳ふ如くさら〳〵と、登り果てたる三層の、屋根

瀧澤馬琴

かたみ送

浮圖

(一)足利持氏の子。鎌倉の管領。

(二)管領足利氏の執權職。

(三)支那周代の哲學者。名は翟。

(四)姓は公輸、名は般。魯の人。巧に機械を作つた。

にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有樣、浮圖の上なるこふの巣を、巨蛇の狙ふに似たりけり。

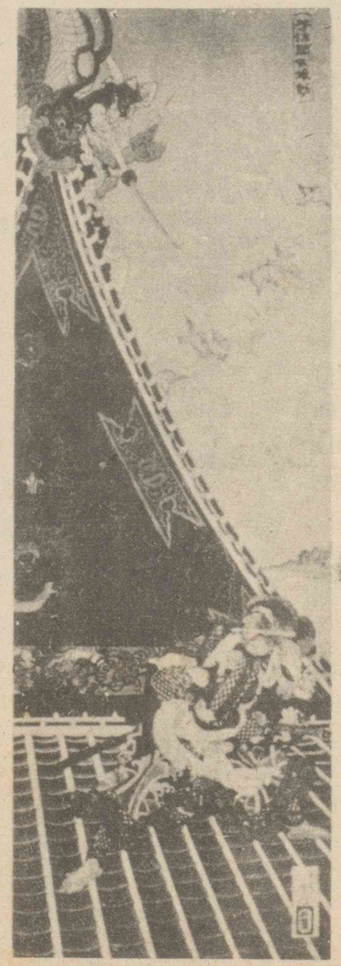
廣庭には成氏朝臣(一)、横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹卷したる許多の士卒、槍、長刀をきらめかし、或は矢を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば擊留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りてみぎりを浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に勝ちたりとも、墨氏(三)が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般(四)が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。かれ鳥ならずも羅に入りぬ。獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、事皆やまん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斬落しつる後は、絶えて近附く者もなきに、今唯獨り登り來ぬ

(一)第二十九代欽明天皇の朝百濟に使し、雪夜幼兒の虎に食はれたのを憤り、虎穴をさぐつて虎を獲た人。

(二)和田義盛の臣。將軍源實朝の前で二箇の大鹿角を重ねて折つた。さもあらばあれ（遮見）

るは、世に覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便(一)が、虎を暴にせる勇あるか、また富田(二)の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。さもあらばあれ一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難き事やはある。



芳流閣上の血戰（月岡芳年筆）

よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀨の如きはこ棟に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふやう、「かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりと

擬議
一上一下
虚々實々
見る目遙か
錚然

てもからめかねて、他の援を借る事あらば、獄舍の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。からめ捕るとも擊たるゝとも、勝負を一時に決せんものを」と、思ひにければちつとも擬議せず、「御諚ざふ」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くにはこ棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず。心得たり」と鋭き太刀風に、擊つをはつしと受留めて、拂へばすかさずこむ刀尖を、支へて流す一上一下、滑る甍を蹈止めて、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば廣庭なる主從士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいとど遙かなり。

さる程に、犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌增して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然

爲體
つば（鍔）
ねぢる（捩）
覆車

として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕べの虹かと見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を爭ひし爲體、世に未曾有の晴業なれば、見八は著籠の鎖肱當のはづれを、裏かくまでに切裂かれしかど、太刀を拔かず。信乃は刀の刃も續かで、初に淺痍を負ひしより、次第に痛みを覺ゆれども、足場を計りて撓まず、去らず、疊みかけて擊つ太刀を、見八右手に受流して、返す拳に附入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手をちようと受留むる、信乃が刃はつば際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんずと組むを、そがまゝ左手に引著けて、かたみに利腕しかと取り、ねぢ倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく蹈滑らして、河邊の方へころ〳〵と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しきかけづくりに、削り成したる甍の勢、止るべくもあらざめれど、かたみに取つたる拳を緩

めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の、底には入らで程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、うち累りつゝどうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちようと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、さそふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一八　流泉啄木

今は昔、源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子なり。萬づの事にすぐれてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に彈きけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にてありけり。

その時に逢坂の關に一人のめしひ、庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞ言ひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雜色にて

(一)第六十代醍醐天皇の御孫。天元三年(一六四〇年)歿、年六十三。
(二)克明親王。管絃の道
(三)第六十二代村上天皇。
(四)山城(京都府)と近江(滋賀縣)との國境
(五)第五十九代宇多天皇の第八皇子。
雜色　あながちに好む

なんありける。その宮は宇多天皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を彈き給ひけるを常に聞きて、蟬丸、琵琶をなん微妙に彈く。

然る間この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關のめしひ、琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、めしひの家異樣なれば行かずして、人をもてうち〳〵に蟬丸に言はせけるやう、「など思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし」と。めしひこれを聞きて、その答をばせずしていはく、

世の中はとてもかくてもすごしてん
　みやもわらやもはてしなければ

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう、「我あながちにこの道を好むによりて必

流泉啄木

齋藤弓弦筆

ずこのめしひに會はんと思ふ心深し。それにめしひ命あらん事も難し。また我が命も知り難し。琵琶に流泉、啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべき事なり。たゞこのめしひのみこそ知りたるなれ。構へてこれが彈くを聞かん」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。

然れども蟬丸その曲を彈く事なかりければ、その後三年の間、夜夜逢坂のめしひが庵の邊に行きて、その曲を今や彈く今や彈くと竊かに立聞きけれども、更に彈かざりけり。三年といふ八月の十五日の夜、月少しうは曇りて、風少しうち吹きたりけるに、博雅あはれ今夜は興あり。逢坂のめしひ今夜こそ流泉、啄木は彈くらめ」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、めしひ琵琶をかき鳴して、もの哀れに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、めしひ獨り心をやりて詠じていはく、

あふさかの關のあらしのはげしきに

すき者
心得たらん人

しひてぞゐたるよをすごすとて

とて琵琶を鳴すに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀れと思ふ事限りなし。めしひ獨言にいはく「あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすき者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし、物語せん」と言ふを、博雅聞きて音を出して「王城にある博雅といふ者こそ此に來たれ」と言ひければ、めしひのいはく「かく申すは誰にかおはする」と。博雅のいはく「我はしか〳〵の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵の邊に來つるに、幸ひに今夜汝に會ひぬ」めしひこれを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵の内に入りて、かたみに物語などして、博雅「流泉、啄木の手を聞かん」と言ふ。めしひ「故宮はかくなん彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す〳〵喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯この如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれ哀れなる事なりかし。蟬丸賤しき者なりといへども、年頃宮の彈き給ひける琵琶を聞きて、極めたる上手にてありけるなり。それがめしひになりにければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、めしひの琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。（「今昔物語」に據る）

一九　四季小品

春雨

中島廣足[一]

（一）江戸時代の國學者。櫪園と號した。肥後の人。元治元年（一八六四）、年十七。

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しをれたる鳥ともの、そこはかとなく飛びわたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ今ひときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまたゝきたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなどもをかし。

—櫪園文集—

風鈴

香川景樹[一]

（一）江戸時代の歌人。桂園と號した。因幡の人。京都に住んだ。天保十四年（一八四三）、年七十六。

月の晴れわたり、花の散行くときく〳〵を告ぐる、いと哀れなり。かの入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日かげろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせたる物にも似ず。

—かるかや集—

清水濱臣筆蹟

きぬた

清水濱臣[二]

（二）江戸時代の國學者、醫師。泊酒舍と號した。江戸の人。文政七年（一八二四）、年四十九。

山家霰
やまゝとに
こほれる雨
のおとなふ
やふもとに
見えししく
れなるらむ
濱臣

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。かりがねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音の

かりがねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂きゆゑか。みなあらず。聞く人の心の寂しきなり。

—泊洒舍文集—　藤井高尚[一]

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの、流石にをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたの、おのれと音するなど、とりあつめて哀れなる事多かり。かく心を盡してもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん、物の音なひもたえ〳〵なれば、小屋近く鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

—松の落葉—

冬のこゝろ　伴蒿蹊[二]

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨

(一)江戸時代の國學者。松の屋と號した。備中の人。天保十一年(一八四〇)歿、年七十七。

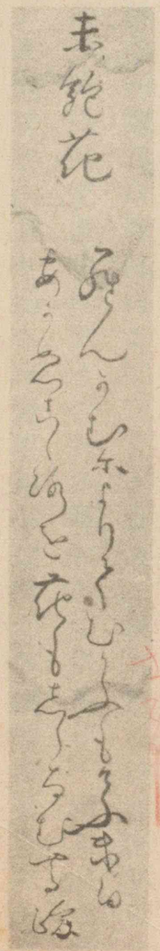
ひた

音なひ

いぎたなし

(二)江戸時代の國學者。閑田學芳。名は資名。近江の人。文化三年(一八〇六)歿、年七十四。

にかはり、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移りて雪とつもる。一歳の月日はひま行く駒の程もなきかな。振分髪のうなゐ子が大人しくなりぬと言はれしなんやがて老のはじめにて、終にひげ髪の白くなりぬるをしもつく〳〵と思ひ比べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし。「少壯いくばく時ぞ、老をいかん」と詩にも聞ゆるを、徒に朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふ事もあり。我にな做ひ給ひそよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。老いては益、壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあ



伴蒿蹊筆蹟

未飽花
らんかむに
よりてむか
ふもけふ幾
日あかぬこ
ころを花も
しらなむ　蒿蹊

(一)漢の武帝「秋風辭」の詩句。

(二)「少くして大志を有し、賓客に謂つて曰く、丈夫しの志たる、窮しては當に益く堅かるべく、老いては當に益壯なるべし。」(後漢書、馬援傳)

らずたゞ寒きにたへねば、ひたや籠りに籠る程に、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言はん。　―閑田文草―

異國情緒

二〇　蘭學開眼

王城の地に鳴り渡る南蠻寺の鐘の音は、異國情緒を漂はせると共に、我が國文化の轉生を告げる聲であつた。蓋し一國文化の消長は、外的刺戟の强弱によつて左右される。切支丹宗の渡來は、ポルトガル人やスペイン人の、東洋キリスト教化の意圖に基づくものではあつたが、その將來した西方の異國文化は、嘗て東洋に類例のない科學文明の精粹であつた。自ら廢頽の淵に沈淪した我が國の文化は、この異國文化の洗禮を受けるに及んで、漸く再生の曙光を見る事となつた。

將來する

洗禮

再生の曙光

けれども、切支丹宗門の跳梁は政治の當路者の忌諱に觸れて、やがてその布教を禁ぜられ、更にそれが鎖國にまで徹底してしまつた。文化の阻止。將に流れ入らうとする泰西の文化は、この鎖國といふ政治的禁斷に會して、徒に我が國土を繞る四周の海に漂つた。

しかしながら、この峻嚴な鎖國令の下にも、オランダ人との關係は永く續けられ、長崎のオランダ屋敷に、紅毛異人の姿の絶えた事はなかつた。明朗なギヤマンの器物、精緻なオランダ更紗の類、オランダ人は唯商賈として我が國人に接した。日蘭三百年の交渉、それは主として通商貿易に限られたものであつた。しかも珍奇な紅毛人の智力に對する憧れは、微ながらも我が國人を驅つて、異國文化の探索に、科學知識の探究に赴かしめた。

江戸時代の中葉、八代將軍吉宗は洋書の禁を緩めた。長崎のカピタンに就いて西洋を知つた吉宗、その音樂に耳を傾けたといふ吉

(一)江戸時代の蘭學者。幕府の儒官。名は敦書。蕃書の裁培を奬勵して甘藷先生と稱せられた。(二)明和六年(一七六九)、天保四年(一八三三)。

先鞭を著ける　勞頭

宗は、西洋暦の精密なのに驚歎して、暦の根本的改正を行つた。そして自ら洋學の奬勵者となり、青木昆陽(一)はその命を受けて、洋學の研究に先鞭を著けた第一人者となつた。當然知らるべくして知られなかつた洋學は、茲に堅き扉を開いた。泰西文化流入の途は、またおのづから茲に開けたのである。

徳川吉宗

一人の偉人出でて堤を切れば、滔々たる文化の流は忽ち入來つて、その國土を洗ふ。近世日本の恩人は正に將軍吉宗であつた。さはれ未知なる物に接してその眞髓に觸れ、その核心をつかむ事は容易の業ではない。先人の努力は悉くこれに籠められた。耳目に馴れない西方異國文化傳來の勞頭には、これ等先人の慘憺たる辛苦が盡されたのである。

青木昆陽

當時に於ける洋學は卽ち蘭學であつた。そしてその研究は、先づ文字を解する事から始つた。昆陽は年々長崎から江戸にやつて來るカピタンの隨從、オランダ通事を介して、オランダ人から横文字を習つた。また自ら長崎に到つてその學習に努めた。和蘭文字略考は昆陽が習ひ覺えた僅々五六百の語を、子音と母音とを附けるいはゆる「寄せ合せ」の工合から、名詞、動詞、形容詞などといふものを横文字で書いたものであつた。唯冠詞、前置詞の類はないが、それは「オランダの語には助辭多くして解し難し」とて、餘程困難なるものであつたらしい。昆陽が長崎に到つた時、オランダ通事たちは「私どもは代々通事の役を勤めてゐるが、横文字を讀む事は禁制になつてゐる。それ故唯

幹旋

(一)豐前中津藩の醫師。蘭學鼓吹者の一人で、杉田玄白等と有名な解體新書を飜譯した。享和三年(二八〇三)歿、年四十六。

(二)若狹小濱藩の醫師。文化十四年(一八一七)歿、年八十一。

(三)若狹小濱藩の醫師。天明六年(一七八六)歿、年四十八。

(四)今東京市荒川區。

耳で聞いて口で言ふだけで、應接の間に欺かれるやうな事があつても押へられぬ。私どもにも横文字を讀む事を周旋して戴きたい。」と依頼したといふ。かくて昆陽の斡旋によつて、長崎の通事も横文字を讀む事を許された。蘭學は茲に江戸と長崎とから興る事となつた。前人未到の學問の領域に足一歩蹈込めば、その悉くが不可解な謎に等しい。これを解かうとしていか程の犧牲を拂ふ事か。其所に先覺者の苦痛がある。昆陽は唯一人蘭學の途を歩んだ。しかし、その晩年彼は一人の後繼者を得た。それが前野良澤(一)である。良澤には また杉田玄白(二)中川淳庵(三)といふ知友が出來た。この三人は相携へて、「蘭學事始」の辛酸を具さに嘗めたのである。

杉田玄白はオランダ人から解剖の書物を得て、その五臓六腑の圖が古來の說と甚だ異なつてゐるので、實物に照してみたいと思つてゐた。そして江戸の南(四)千住にある小塚原に罪人の腑分のある

契合する

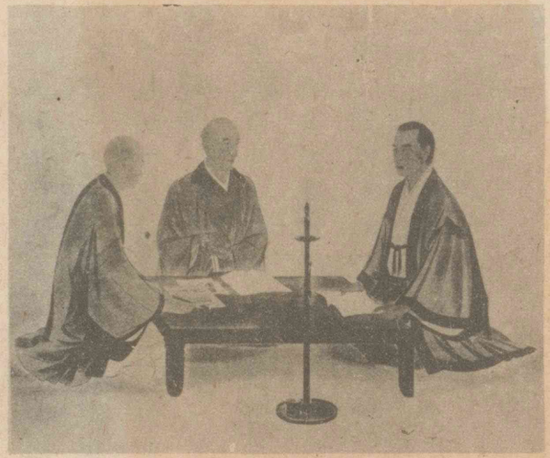
事を聞き、淳庵をはじめ良澤をも誘つて刑場に到つた。時に良澤は懷から一つの蘭書を取出して「これを今日實驗してみたい。」と玄白に圖つた。見れば、玄白の書と全く同じ解剖書である。期せずして彼等兩人は同じ書物を抱いて來たのであつた。兩者の疑問は相合致し、その研究心は燃えさかつた。腑分の結果は悉く西洋の解剖圖に契合する。其所に寸分の相違のない事を知つて、今更に紅毛異人の卓越した科學的知識に驚歎したのである。是に於てか彼等はオランダの解剖書を讀破かうと決意した。そして知識慾に燃えた彼等は、その翌日から直ちに飜譯の業に著手したのである。

けれども、舵のない船が大洋に乘出したやうに、文字の知識に乏しい彼等は、全く自由を失つた。茲に彼等の世にも珍しい飜譯譚の數々が展開されたのである。解剖圖の初には人の顏があつた。その鼻の所に「フルヘッヘンド」といふ語が出てゐる。ところが良澤が長崎

から求めて來た簡略な小册子の中に「生木を切ると、切つた跡がフルヘッヘンドする。また庭を掃除して塵を掃溜めるとフルヘッヘンドする」とある。そこで玄白は「生木を切つた跡はもちあがる。塵がたまると高くなる。これは『堆し』と譯したら宜からう」と解いた。「鼻は顏の中で堆い、それは名案である」と言つて、互に鬼の首でも取つたやうに喜び合つたといふ。さうかと思ふと、一行の句を呆然と三人で眺め暮したといふ事もあつた。かくて蘭學の研究に志す者も數名これに加り、月々五六回集會し研究してゐるうちに、半枚ぐらゐ讀めるやうになつた。その喜悅は我等の想像以上のものであつたに相違ない。それを「集會の日を待焦れること、女子供が祭禮を見に行くやうな心持である」と玄白は言つてゐる。そこで良澤が授けて玄白が書く。四年の間に稿を更へること十一回、世に名高い解體新書(一)はかくして出來た。

(一)原書は「ターヘル・アナトミア」

今より百五十年前、未知未見のオランダ解剖書の飜譯を志して、僅々四年の間にその業を完成した彼等の根氣と精力とは、到底人間業ではなかつた。近代學術の鼻祖は紅毛人の智力を追ひ、嘗て見ざる慘憺たる辛苦を重ねて茲に歡喜の日を迎へたが、それはやがて我が國の文化に科學的根柢を築く素地となるものであつた。



蘭學事始（長谷川路可筆）

解體新書の著作者は、言ふまでもなく良澤、玄白、淳庵の三人である。けれども良澤は自身の名を出す事を肯じなかつた。彼は、私は嘗て筑前の天滿天神に誓つた事がある。「自分は蘭學を始めます。どう

ぞこの業の成るやうに祈り奉ります。私は名聞利益の爲にするのでは御座りませぬ。その學の實を知りたいといふ念で御座ります」。といふ神佛に對する誓言を、堅く守つたのであると言ふ。その發意の純眞なる、その研究の熾烈なる、百世長く傳ふべきではないか。

文化轉換の鍵は時代に醒めた人の手に握られる。彼等は常に時代を洞察して、よくその趨勢を馴致して行く。

先驅の偉人が遺した功業は、おのづから後世文化の指針となるのである。蘭學開眼。――それは近世文化の出現に華々しいスタートをつけたものであつた。

帝國實業讀本　改制新版　卷七　終

附　錄

一　敬讓語（口語）

一　敬讓の意を含む文語動詞

一　國語假名遣一覽

敬讓語（口語）

一　名詞

（甲）お年　お顏　お宅　お歸り　お休み　おいくつ
おいくたり　お一つ　お十一　御返事　御挨拶
御機嫌　御本

（乙）神さま　井上さん　太郎君

（丙）お母さま　お弟さん　御尊父さま

二　人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし わたし	あなたさま あなた	この（おかた） その（お）かた あの（お）かた	どの（お）かた どなたさま どなた

三　動詞

（甲）本來の敬讓語〔○印は連語を示した〕

あがる・召しあがる（食フ、飲ム）

あそばす・なさる（爲ル）

いらっしやる（來ル、行ク、居ル）

おこしやる（言フ）

おぼしめす（思フ、考ヘル）

くださる（與ヘル）

見える（來ル、居ル）

めす（呼ブ、着ル、穿ク、乘ル、買フ）

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

○お出でになる、お出でなさる（來ル、行ク、居ル）

あがる、參上する（訪ネル、行ク）

あげる、さしあげる（與ヘル）

いたす、つかまつる（爲ル）

いただく、頂戴する（貰フ、食フ、飲ム）

うかがふ（聞ク、訪ネル）

ございます（居ル、有ル）

存ずる、存じ上げる（知ル）

たべる（食フ）
申す、申上げる（言フ）
まゐる（行ク、來ル）
拜見する（見ル）　拜借する（借リル）
拜讀する（讀ム）　拜聽する（聞ク）
○お目にかかる（面會スル）　お目にかける、御覽に入れる（見セル）（以上、へり下る意、丁寧の意を表すもの）

（乙）敬讓動詞のつくり方〔○印は連語を示した〕

お歌ひ
- 遊ばす
- なさる
- 下さる
- に、なる

御苦勞
- 遊ばす
- なさる
- 下さる
- に、なる

○見て下さる、讀んで下さる（以上、尊敬の意を含むもの）

お屆け
- 申す
- 申上げる
- 致す

お供
- 申す
- 申上げる
- 致す

○お屆けする、お供する（以上、へり下る意のもの）

（丙）尊敬の意の添へ方（助動詞「れる」「られる」を附ける）
父は英書も讀まれる。
今日は佐藤君も來られる

（丁）丁寧の意の添へ方（助動詞「ます」を附ける）
先生も仰つしやいます。
私からも申上げます。
先生もお歌ひになります。
私もお供致します。
紙が飛びます。

四　形容詞

（甲）「お」を附ける。
こんなにお暑いのに……。
お恥しい次第ですが……。

（乙）「です」「ございます」を附ける。
これは古い(の)です。
これは新しうございます。
それはお高い(の)です。
それはお珍しうございます。

五　形容動詞（「お」「ご」を附ける）

それはお珍しからう。
若しお寒かつたら……。
あそこはお靜かでせう。
あそこはお靜かでしたか。
そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。
ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

六　副詞

おまめにお働きなさいますね。
どゆつくりなさいまし。
ここはお靜かではございません。

七　「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを用ひる。
あれは學校です。
あれは學校でございます。
あのかたは先生でいらつしやいます。
大將はその時、少將でお出でになつた。

敬讓の意を含む文語動詞

（甲）

尊敬の意を含む語

あそばす（爲ル）

います、ます、ます、ます（アル、居ル、行ク、來ル）

おはす、おはします（同前）

おほす（言フ、言ヒツケル）

おぼす、おぼしめす（思フ）

きこしめす（聞ク、飲ム、食フ）

しろしめす（知ル、統べ治メル）

たてまつる（著ル、乘ル）

たまふ、たぶ（與ヘル）

のたまふ（言フ）

まゐる（飲ム、食フ、著ル）

みそなはす（見ル）

めす（飲ム、食フ、著ル、乘ル）

わたる（アル、居ル）

（乙）

へり下る意、丁寧の意を含むもの

いたす、つかまつる（爲ル）

うけたまはる（聞ク、承諾スル）

さふらふ（アル、居ル）

きこゆ、まうす（言フ）

たてまつる、まゐらす（與ヘル）

たまはる（貰フ、受ケル）

はべり（アル、居ル）

まかる（退ク、歸ル、行ク）

まゐる（行ク）

國語假名遣一覽

わ（は）

わ（輪）
くち**わ**（口輪―轡）
おほ**わ**（大輪）
おも**わ**（面輪）
はに**わ**（埴輪）

わ（廊）
くる**わ**（廊）

わ（曲）
うら**わ**（浦曲）
いそ**わ**（磯曲）

あわ（沫）
あ**わ**もり（泡盛）
みな**わ**（水沫）

わけ（分）
いひ**わけ**（言分）
こと**わけ**（辭分）
おひ**わけ**（追分）
の**わ**き（野分）
わけがら（譯柄）
ひき**わけ**（引分）

わた（綿）

わた（腸）
はら**わた**（腸）
この**わた**（海鼠腸）

こわ（聲）
こ**わ**いろ（聲色）
こ**わ**ね（聲音）
こ**わ**づかひ（聲遣）
こ**わ**づくろひ（聲づくろひ）
こ**わ**だか（聲高）

わざ（業）
し**わ**ざ（仕業）
こと**わ**ざ（言業―諺）

わり（割）
こと**わ**り（事割―理）
し**わ**（皺）
ひ**わ**（鵝）
た**わ**ら（俵）
い**わ**し（鰯）
あ**わ**つ（周章）
た**わ**し（東藁子）
く**わ**ゐ（慈姑）
た**わ**やか（嬋娟）
た**わ**やめ（手弱女）
た**わ**む（撓む）

よ**わ**し（弱し）
か**わ**く（乾く）
さ**わ**ぐ（騷ぐ）
す**わ**る（坐る）
あ**わ**たゞし（惶し）
さ**わ**やか（爽か）
た**わ**いなし

語の中や下に來る「わ」は右に擧げた他は「は」を用ひる。例へば
川澤　栗瓦　雞庭　桑諏訪　安房　永久繩　障廻る　變る　かはいらし等

ゐ（い）

ゐ（井）
ゐど（井戸）
ゐげた（井桁）
ゐぜき（井堰）
ゐづつ（井筒）
ゐくひ（井杭）

ゐで（井手―堰）
ゐなか（井中―田舍、田園）
ゐもり（井守―蠑螈、蝘）

ゐ（居）
ゐざり（居去―膝行）
かもゐ（鴨居）
しきゐ（敷居―閾）
くもゐ（雲居）
くらゐ（座居―位）
とのゐ（殿居―宿直）
まとゐ（圓居）
もとゐ（本居―基）
まゐる（目居る―參る、詣る）

ゐ猪（ゐのしゝ）
ゐのこ（亥の子―豚）
ゐくび（猪首）
いぬゐ（戌亥―乾）

ゐ（亥）

ゐる（率）
ひきゐる（引率る―率る、將る）
もちゐる（持率る―用、以）

ゐ（藺）
おほゐ（大藺）
ゐぐさ（藺草）

あゐ（藍）
くれのあゐ（呉の藍—紅）
なゐ（地震）
うなゐ（髫髮）
かたゐ（乞食）
くわゐ（慈姑）
あぢさゐ（紫陽花）
ゐろり（爐）
ゐや（禮）
「ゐ」の假名をつかふ語は右に掲げたもので、その他、上に來る「い」の音は「い」を用ひる。例へば
今　糸　石　岩　池　犬
急ぐ　怒る　頂く　往ぬる
訝る　いたはる等

い音便
さいたま（埼玉）
さいはい（幸）
きさい（后）
ついたち（月立—朔）
ついたて（衝立）
やいば（燒刃—刃）
かい（掻—櫂）
かうがい（髮掻—笄）
たいまつ（燒松—松明）
ついぢ（築地）
かいしろ（垣代）
かいぞへ（介添）
さいて（咲いて）
といて（解いて）
ついで（次いで—序）
ついばむ（啄む）

加音
しいか（詩歌）
しいじ（四時）
むいか（六日）
語の中や下に來る「い」は右のものだけで、その他は「ひ」を用ひる。例へば
鯛　貝　鯉　笈　蠶　鷺
舞　謠　假令　小し　問ひ
疑ひ　買ひ　思ひ等

う（ふ）音便
あきうど（商人）
いもうと（妹人—妹）
おとうと（乙人—弟）
なかうど（仲人—媒酌）
くろうと（黑人—玄人）
しろうと（白人—素人）
かうし（格子）
かうべ（神戸）
こうぢ（小路）
てうず（手水）
かうぶり（冠）
たうげ（手向—峠）
ひうが（日向）
こうや（紺屋）
はうき（箒）
かうち（河内）
ひやうし（拍子）
まうで（詣で）
たかう（高う）
ならうて（習うて）
おもうて（思うて）
とうて（問うて）
かたじけなうす（辱うす）
まうす（申す）

加音
やうか（八日）
まうく（設く）
やうやう（稍、漸）
にようばう（女房）
ふうふ（夫婦）
語の中や下に來る「う」は右の樣な場合で、この他は「ふ」を用ひる。例へば
食ふ　言ふ　思ふ　購ふ
補ふ　償ふ　仰ぐ等

ゑ（え）
ともゑ（巴）
ゑる（彫る）
ゑぐる（剜る）
ゑむ（笑む）
ゑがほ（笑顏）
ゑくぼ（靨）
ゑつぼ（笑壺）
ゑむ（咲む）

ゑ（餌）
ゑさ（餌）
ゑぶくろ（餌袋）
ゑばこ（餌箱）
ゑぼうし（烏帽子）
ゑんじゅ（槐）
こゑ（聲）
つゑ（杖）
つくゑ（机、几）
ゆゑ（故）
ゆゑん（所以）
すゑ（据ゑ）
すゑぜん（据膳）
すゑふろ（据風呂）
いしずゑ（礎）
すゑもの（陶器）
すゑひろ（末廣）
こづゑ（梢）
うゑ（餓）
うゑじに（餓死）
うゑ（植）
うゑき（植木）

ゑ（繪）
ゑま（繪馬）
ゑのぐ（繪の具）
ゑがく（畫く—描く）
ゑどる（彩る）

うゑこみ（植込）
えぐし（蔬し）
上中下に來る「ゑ」は右の場合だけでこの他、上に來る「え」の音は「え」を用ひる。例へば
蝦　枝　箙　榎　蝦夷　夷
選ぶ　襟　似而非　得物等

え（兄）
きのえ（木の兄—甲）
ひのえ（火の兄—丙）
つちのえ（土の兄—戊）
かのえ（金の兄—庚）
みづのえ（水の兄—壬）

え（枝）
しづえ（下枝）
ずはえ（條）

え（江）
いりえ（入江）
ふえ（笛）
ぬえ（鵺）
はえ（鮠）
ひえ（稗）
さじえ（蠟蝦）
ながえ（轅）
え（柄）
こえ（肥）
やまどえ（山越）
みえ（見え）
はえ（生え）
いえ（癒え）
あまえる（甘える）
おびえる（脅える）
おぼえる（覺える）
さえる（冴える）
たえる（絕える）
ふえる（殖える）
中下に來る「え」は右の場合でこの他は「へ」を用ひる。例へば
家　苗　膚　楓　蛙　歸る
辨る　喘ぐ　敢へて　剩へ
堪へる　悶へる等

を（お・ほ・ふ）

を（男）
をとこ（男）
をのこ（男）
をつと（夫）
ますらを（丈夫）
みやびを（風流男）
さつを（獵夫）
をひ（甥）
をゝし（雄々し）
をす（牡）
さをしか（小牡鹿）
めをと（夫婦）

を（緒）
たまの**を**（玉の緒）
はな**を**（鼻緒）
ほぞの**を**（臍帶）

を（小）
をぢ（伯父、叔父）
をば（伯母、叔母）
をば（小母）
をす（小簾）
をがは（小川）
をみごろも（小忌衣）
をぐな（童男）
をとめ（少女）
をんな（女）
をなご（女子）
をみなへし（女郎花）
をぎ（荻）

を（尾）
をばな（尾花）

を（水脈）
みをつくし（澪標）
とを（十）
をろち（大蛇）

を（麻）
をだまき（苧環）
をゝだまき（緒環）
をから（麻幹）
をけ（苧笥—桶）
をさ（筬）

を（岑）
をの（尾の上—岑上）
をか（岡—丘、陵）
をかぼ（陸稻）

をさ（長）
むらをさ（村長）
ふなをさ（船長）
しでのたをさ（死出田長）
をさなし（幼、稚）
をさをさ（大抵）

をち（遠）
をちこち（遠近）
をとひ（一昨日）
をとし（一昨年）

をる（折）
たをを（手折る）
をしき（折敷）
つゞらをり（九十九折）
しをり（栞）
をる（萎る）

をこ（愚）
をこがましい
をこぜ（臘）

をを（唯）
かはをそ（巓）
をしどり（鴛鴦）
をの（斧）
をり（檻）
をしね（晩稻）
あを（青）
いさを（功）

いさをし（績—勳）
ばせをし（芭蕉）
みさをし（操）
やをら（徐）
たをやか（嬋娟）
たをやめ（手弱女）
をとり（囮）
をかす（犯す）
をがむ（拜む）
をどす（威す）
をす（食す）
をさむ（治む）
をさむ（納む）
をさむ（藏む）
をしむ（惜しむ）
をしふ（教ふ）
をふ（終ふ）
をはる（終る）
をめく（叫く）
をのく（戰く）
をどる（踊る—躍 踴）
をる（居る）
あをむく（仰く）
かをる（香る—薫）
まをす（申す）
しをる（撓る）
をかし（可笑し）
をし（愛し—惜）
くちをし（口惜）
をさなし（幼し）

さを（竿）
つりざを（釣竿）
みさを（水竿—棹）
うを（魚）
いを（魚）
ひを（氷魚）
しらを（白魚）
いをのめ（魚の目—眈）
かつを（鰹）

右の外、上には「お」を用ひ、中下には「ほ」を用ひる。例へば
親 沖 弟 鬼 祖父 驚く 遲く 恐し等
顏 鹽 潮 火の穗（焰）
氷 郡 蟋蟀 透る 滯る
直し 遠し 通す等

中下に「ふ」を用ひ、文語では轉呼音で「お」と發音するものがある。例へば
問ふ 思ふ 買ふ 添ふ
願ふ 貰ふ 拾ふ 習ふ
訪ふ 沿ふ 乞ふ 扱ふ
害ふ 違ふ 誘ふ 纏ふ
事ふ 拂ふ 叶ふ 憂ふ

候ふ 扇ぎ 仰ぐ 葵 樗
近江 今日 昨日 倒る 貴し 尊ぶ等

ぢ（じ）

ぢ（父）
おほぢ（祖父）
をぢ（伯父—叔父）
ぢぢ（祖父）
ぢぢ（老翁）
ぢぢむさし
をぢ（小父）
すぢ（筋）
うぢ（氏）
ぢ（路）
こうぢ（小路）
ひぢ（肘）
あぢ（味）
あぢ（鯵）
かぢ（梶）
かぢ（楮）
かぢ（鍛冶）
ひぢ（泥）
ふぢ（藤）
ふぢばかま（藤袴）
かうぢ（麹）
くぢら（鯨）
ことぢ（琴柱）

ねぢ（餒）
わらぢ（草鞋）
なんぢ（汝）
なめくぢ（蛞蝓）
もみぢ（紅葉）
はぢ（耻）
ふぢな（蒲公英）
あぢさゐ（紫陽花）
みそぢ（三十）
よそぢ（四十）
いそぢ（五十）
むそぢ（六十）
かぢめ（搗布）
ちぢむ（縮む）
ねぢる（捻る）
とぢる（閉ぢる）
とぢる（綴ぢる）
はぢる（耻ぢる）
よぢる（攀ぢる）
ひぢる（濡ぢる—泥）
もぢる（捩ぢる）
ねぢける（佞る）
あぢはふ（味ふ）

「ぢ」を用ひるのは右の語だけで、他は「じ」を用ひる。例へば
虹 雉 籤 躑躅 交る
詰る 辱し 著し等

ず（づ）

かず（數）
きず（傷）
くず（葛）
はず（筈）
ゆはず（弭）
もず（鵙—百舌鳥）
みゝず（蚯蚓）
はずみ（機）
ねずみ（鼠）
あんず（杏）
すず（鈴）
すず（錫）
すずむし（鈴蟲）
すずき（鱸）
すずな（菘）
すずしろ（大根）
すずめ（雀）
すずし（生絹）
すずろ（漫）
ずず（數珠）
ずさ（從者）
ずはえ（條）
いしずゑ（礎）
くず（國栖）
こずえ（梢）
かならず（必ず）
たたずむ（佇む）

なずらふ（準ふ）
ひずむ（歪む）
すずし（涼し）
すずり（硯）
まず（交ず—混）
ゆず（柚子）

右の他は「づ」を用ひる。例へば
水 屑 泉 雷 酸漿 渦
煩ふ 貧し 續く かゝず
らふ等

昭和七年十一月一日印刷
昭和七年十一月三日發行
昭和八年七月二十日訂正再版發行
昭和十一年九月十五日訂正三版發行
昭和十六年九月三日訂正七版印刷
昭和十六年九月七日訂正七版發行
昭和十二年三月廿三日訂正四版發行
昭和十二年七月十三日訂正五版發行
昭和十二年十二月十八日訂正六版印刷
昭和十二年十一月廿一日訂正六版發行

定價
卷一—卷六　金六拾錢
卷七・卷八　金五拾四錢
卷九・卷十　金五拾壹錢

帝國實業讀本　改制新版

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平
發行者　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者　坂本守正
印刷所　精版印刷株式會社
大阪市西淀川區海老江上四丁目二十三番地

HAGA 檢 芳賀

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一—二一七八番　振替口座東京五〇一番

大阪市北區天神橋町九番地
小原製本所謹製

千早ふる　神代より
聞かざりしかも
紅の
ひとしぼりかな

帝嵩
栗栖晴

東京都杉並区高井戸西
一丁目栗栖晴

四北
栗栖晴

広島大学図書
2000302111

資料室

375.9
Ha7

芳賀矢一編
帝國實業讀本 巻5-6 改制新版 上田萬年,長谷川福平訂補
東京 冨山房 昭和12 訂正6版
2冊 21cm 和

K35910

資料室

375.9
Ha7

芳賀矢一編
帝國實業讀本 巻7,9 改制新版 上田萬年,長谷川福平 訂補
東京 冨山房 昭和16 訂正7版
K359.10 2冊 21cm
巻9は中等学校教科書株式会社発行

Revoltion

Revolution

Revolution

Dune